

国 際 セ ン タ ー 年 報

第 21 号

平 成 28 （2016）年 度

大 阪 教 育 大 学 国 際 セ ン タ ー

目 次

第一部 寄 稿

巻頭言	高 橋 登	1
	(国際センター長)	
国際交流実践報告-台湾・屏東大学との交流から	加 藤 可 奈 衛	2
	(教員養成課程 美術教育講座)	
日本語・日本文化研修留学生受入れの現状と課題 ープログラム充実に向けてー	長 谷 川 ユ リ	9
	(国際センター 国際教育部門)	
台湾の小学校における円周率の教育と数学史	城 地 茂	15
	(国際センター 国際事業部門)	
日本語の授業におけるディベート活動の試み ー2016 年度後期 時事日本語 II 実践報告ー	古 川 敦 子	22
	(国際センター 国際教育部門)	

第二部 国際センター記録

平成 28 年度 国際センター活動報告	30
平成 28 年度 国際センター行事	47

付 記

平成 28 年度 国際センター運営委員会名簿	60
平成 28 年度 留学生宿舍運営会議名簿	60
平成 28 年度 国際交流委員会委員名簿	61
平成 28 年度 私費留学生奨学金等推薦選考会議名簿	61
平成 28 年度 留学生推薦選考会議名簿	62
平成 28 年度 留学生推薦選考会議語学評価委員名簿	62
編集後記	63

巻頭言

国際センター長

高橋 登

国際センターの主たる任務は、海外からの留学生が本学で充実した学生生活を送れるようにサポートし、また、本学学生の海外留学をサポートすることです。若いうちに自国を離れ、異なる文化に身を置くことは、視野を広げ、異なる文化への尊敬と寛容を身につける上で、貴重な経験となります。私たちは多くの留学生が本学で学び、本学学生の多くが海外で学ぶことを願っています。

ただし、自分と異なる文化的背景をもつ人々と理解し合うのは容易なことではありません。もちろん、言葉の問題が大きなハードルとなりますが、私たちは同じ言語で話しさえすれば相手と理解し合えるわけではありません。日本語を母語とする者同士でも、相手の言うことが分からない、こちらの言いたいことが伝わらないと感じることはしばしばあります。同じ言語で語り合うことは、互いを理解するための重要な要素ではありますが、それだけで十分ではありませんし、また、必須の条件であるというわけでもありません。

communicate という単語を辞書で調べると、「伝達する、知らせる」だけでなく、「分かち合う、共にする (share)」という意味も出てきます。語源は common と共通であり、伝え手（話し手・書き手）と受け手（聞き手・読み手）との間で、相互のやりとりの中で意味を共有する営みがコミュニケーションなのです。実際、どの様な意図のもとに、どの様な内容をどの様に伝えるかは、受け手との関係、さらには両者が属している文化や社会制度の影響を大きく受けます。異なる文化に属する者同士のコミュニケーションが難しいのは、そうした暗黙の前提が共有されていないだけでなく、互いが相手を自らの枠組みによって理解しようとする事により、ズレや誤解が生じやすくなるためなのです。

異なる文化に身を置き、生活していると、思わぬことで相手を傷つけ、自らが傷つくことがあります。けれども、そうした経験を繰り返すことにより、異文化への感受性が高まるだけでなく、自文化への理解も深まります。そのような経験を通じて、相手への信頼が形作られていきます。互いを尊重しつつ相手を理解しようとする、こうした営みこそがコミュニケーションの根本です。

私たち国際センターの教職員は、大阪教育大学が、様々な文化的背景を持った学生・留学生によるコミュニケーションの場となるよう、すなわち、大阪教育大学が多様性を内包したひとつのコミュニティとなるよう、努力しています。

国際交流実践報告-台湾・屏東大学との交流から

加藤 可奈衛
教員養成課程 美術教育講座

1、はじめに



図1 作品鑑賞（たまごギャラリー）

美術教育講座では、グローバルな視野で美術活動や教育のかかわりについて議論を深め、人的交流を図る目的で国際交流を行っている。美術や音楽などの芸術領域の特性として、「ノンバーバル・コミュニケーション」の可能性があるが、美術教育講座のころみは、まさに「言葉のみに頼らない国際交流・国際理解教育」と言える。普段の日常生活でも、私たちは、言葉を通して理解することだけではなく、言葉を越えた理解、言葉以外の様々な感覚による理解も同時に行っている。このいわゆる

「五感で感じ理解する」というコミュニケーション(図1)のあり方が、美術領域の国際交流実践におけるユニークな特徴の一つである。

平成25年度から「教育研究創造力アップ・グローバル・プロジェクト」を実施し、このプロジェクトの一環で、大学院開講科目「現代的教育課題とアート」の講義をベースにした「現代的教育課題とアート・グローバル・プログラム in 台湾」を実施してきた。国際化に関わる教育実践を授業に取り入れる試みとして、毎年継続的かつ発展的に実施している。

以下、平成25年から平成28年に実施してきた国際交流実践の概略について報告する。

表1 「平成25年～平成28年の招聘/訪問記録」

「現代的教育課題とアート・グローバル・プログラム in 台湾」			平成25年～平成28年		
年度	回	招聘/訪問	月日	招聘/訪問者の所属・人数	交流場所/主な交流内容
平成25年度 (2013年度)	1回	招聘	6月14日	屏東教育大学視覚藝術学系 学生18名、教員3名、	柏原キャンパス/作品鑑賞・学内見学・作品プレゼンテーション
	2回	訪問	10月27日 ～28日	大阪教育大学「現代的教育課題とアート」 受講学生6名、補助学生1名、 教員2名	屏東教育大学/学内見学・作品鑑賞意見交換・自己紹介スライドショー
平成26年度 (2014年度)	3回	訪問	12月16日 ～19日	大阪教育大学「現代的教育課題とアート」 受講生9名、教員2名	屏東大学/自己紹介スライドショー・作品鑑賞意見交換・ワークショップ
平成27年度 (2015年度)	4回	訪問	12月16日 ～19日	大阪教育大学「現代的教育課題とアート」 受講生4名、教員2名	屏東大学/自己紹介スライドショー・作品鑑賞意見交換・ワークショップ・コンサート
	5回	招聘	3月2日	屏東教育大学視覚藝術学系	柏原キャンパス, 海岸通ギ

			～3 日	学生 7 名、 教員 2 名	ギャラリーCASO/作品展鑑賞 意見交換・自己紹介プレゼンテーション・ワークショップ・屏東大学教員講義
平成 28 年度 (2016 年度)	6 回	訪問	12 月 6 日 ～9 日	大阪教育大学「現代的教育課題とアート」受講生 7 名、芸術音楽大学院生 4 名、教員 3 名	屏東大学/自己紹介スライドショー・作品鑑賞意見交換・ワークショップ・コンサート・民族文化研究

2、国際交流「現代的教育課題とアート・グローバル・プログラム in 台湾」実施の経緯

美術教育講座で開講している大学院開講科目「現代的教育課題とアート」では、これまで学生主体の講演会を実施するなど実際の体験を重視し、主体性や企画力の育成に取り組んできた。平成 23、24 年度には学生が主体となり講演会を企画する「アーティストを招こう！プロジェクト」（図 2）を実施した。1)



図 2 学生企画による講演会 2012

一方同時期に、台湾屏東教育大学との協定を結び国際交流をしてみてもどうか？というお話をいただいた。美術教育講座の教員も台湾へ赴き、屏東教育大学の教員と面談し協定交流の実現に向けた調整を行った。そして、本学は、平成 25 年 5 月 20 日に台湾国立屏東教育大学と大学間学術交流協定を締結した。これを契機に、美術教育講座では、屏東教育大学視覚藝術学系との国際的な教育研究連携の機会を得ることになった。2), 3)

そこで、美術教育講座では、学生主体で実施してきた前述の授業「現代的教育課題とアート」に国際交流の実践を組み込むことを発展的に検討した。本プログラムを進める大きなきっかけとなったことは、上述したように台湾の大学との学術交流の機会を得たことである。しかしながら、すでに大学院開講科目「現代的教育課題とアート」の授業目標に「美術や教育の課題をより広い視野からとらえることを目指し、表現、企画、コミュニケーションの能力育成に貢献すること」とあるように、グローバルな視点へのきっかけや必然性があった。

「現代的教育課題とアート・グローバル・プログラム in 台湾」は、学生が主体的に考える授業形態を重視し、グローバルな交流授業、教育実践に関する情報交換、多文化共生教育を考える題材開発など、美術教育研究の活性化を目指す授業展開を試み、教員を目指す学生に対し、教育に対する視野を広げ、知識・技能・態度・創造・思考力を養成することを目的とした。当初、海外交流の方法については手探りで始めたが、平成 23、24 年度の授業実践で培った「学生が主体となる」ことを重点的に考え、学生たちの潜在能力を十分に引き出すように心がけた授業展開を行った。また、海外交流経験を実践している現場の教員や、国際的に活躍する作家などによる特別講義・ワークショップなどを積極的に取り入れることで、学生だけでなく教員も多くのことを学び経験してきた。そして何より、協定連携先大学の教員、学生の積極的でホスピタリティーにあふれた対応におおいに励まされ導かれてきたことに感謝したい。

本プログラムの実践において、学生たちが何を学んだのか、どのような能力を発揮したのかなど、こ

れまでの取り組みについては、『美術科研究』 第 33 4-1、4-2) , 34 号 5) に詳細報告があり参照していただきたい。なお、平成 28 年度の記録については、『美術科研究』第 35 号（平成 29 年発行予定）に詳細報告の予定である。

なお、「教育研究創造力アップ・グローバル・プロジェクト」は、平成 25 年度大阪教育大学戦略的重点経費「教育研究活性化推進経費（教育実践改善経費）」、平成 26 年度学長特別プロジェクト「国際化推進事業」、平成 27 年度学長特別プロジェクト「国際化推進事業」、平成 28 年度学長特別プロジェクト「国際化推進事業」による助成を受け実施した。これらの措置をいただけたからこそ実施が可能であり、この場をかりて心より感謝したい。

3、実践について

これまで招聘 2 回、訪問 4 回の合計 6 回の双方向の交流を行った。以下、それぞれの交流について簡単に紹介する。

- ・第 1 回（招聘） 平成 25 年 6 月 14 日 於：大阪教育大柏原キャンパス
屏東教育大学視覚藝術学系 学生 18 名、教員 3 名、



図 3 美術棟前で記念撮影

記念すべき最初の交流は、平成 25 年度 6 月 14 日、屏東教育大学視覚藝術学系の教員学生 21 名が柏原キャンパスを訪れた(図 3)。柏原キャンパスにて、大学附属図書館たまごギャラリーで開催中の美術教育専攻の学生展を鑑賞し、作品制作研究の成果を活用した交流を行った。また、学内の野外彫刻、美術講義なども見学した。その後、美術棟講義室において屏東教育大学学生による卒業制作作品のプレゼンテーション、そして本学学生との交流を行った。

学生も教員も、先ずお互いを知るという意味から、「自分自身の考えや関心事を整理し、深くあるいは客観的にとらえる力」、「他者の考えや関心に目を向けた相互理解の態度」が重視された。6)

- ・第 2 回（訪問） 平成 25 年 10 月 27 日～28 日 於：屏東教育大学
本学「現代的教育課題とアート」受講学生 6 名、補助学生 1 名、教員 2 名



図 4 制作展会場で記念撮影

6 月の屏東教育大学教員学生の来学を受け、後期「現代的教育課題とアート」授業において学術交流企画を準備し、本学学生代表 6 名、補助学生 1 名、教員 2 名が、平成 25 年 10 月 27 日～28 日の 2 日にわたり、屏東教育大学を訪問した。そこで、屏東教育大学視覚藝術学系学生の制作展の見学(図 4)・意見交換、本学学生自己紹介スライドショー(図 5)、美術や教育に関わる共通の課題の交流プレゼンテーション、屏東教育大学美術講義見学、美術施設見学等をおこなった。後日、それらの成果をポスターにまとめ平成 25 年 12 月 24 日～29 日に茶臼山画廊（天王寺）で開催された附属小中学校教員及び公立小中学校教員との共同研究発表の場である「第 2 回 CGAT 展 図工の時

図 5 大教大学生の自己紹介

間美術の時間」で発表した。4), 7)

- ・第3回(訪問) 平成26年12月16日～19日 於: 屏東大学
 本学「現代的教育課題とアート」受講生9名、教員2名



図6 ワークショップ「漢字ボール」

「現代的教育課題とアート」受講生9名教員2名が、平成26年12月16日～19日の4日間、屏東大学を訪問、学術交流を実施した。事前の特別講義では、国際的に活動する彫刻家による講義・ワークショップをとりいれ、国際交流実践の実際の一端を学び、学生企画の参考とした。

今回の訪問では、連日4人ほどの屏東大学学生が旅程を共にするというサポート体制であった。屏東大学では、自己紹介スライドショー、屏東大学視覚藝術学系学生の作品展、美術教室見学、本学学生企画のワークショップ「漢字ボール」による学術交流を行った(図6)。そのほか、国立屏東高等中学校美術・書道クラス、屏東美術館・台湾排灣族彫刻館や他大学(国立高雄餐旅大学)等を見学し、中国の正月に飾る書のワークショップも行った。帰国後、これらの成果をポスターにまとめ平成27年1月20日～25日にこども美術館スカイミュージアム(あべのハルカス)で開催された「第3回 CGAT展 図工の時間美術の時間」で発表した。

ある程度お互いを把握した2年目は、ワークショップ「漢字ボール」の企画立案から実施を通じて、「協働して一つのコンセプトに基づき活動し、プロセスを重視する」、「体験を共有し気持ちをつなぐことの喜び」などの成果が挙げられた。4-1), 4-2), 8)

- ・第4回(訪問) 平成27年12月16日～19日 於: 屏東大学
 本学「現代的教育課題とアート」受講生4名、教員2名



図7 3回目の屏東大学訪問

「現代的教育課題とアート」受講生4名、教員2名が、平成27年12月16日～19日の4日間、屏東大学を訪問(図7)、自己紹介スライドショー、屏東大学視覚藝術学系学生の作品展見学、美術教室見学、本学学生企画ワークショップ「play for...」による学術交流を行った。本プロジェクトでは、前年度の学術交流授業の構築にむけた課題を検討し、少数ではあるが広く他学科(理科教育、音楽教育)の学生参加による新たな学生企画ワークショップの実施を試みた。



図8 ワークショップ「play for...」記録ポスター

事前の特別講義では、昨年に続き国際的に活動する彫刻家による講義に加え、新たに国際交流に実績のある中学校美術科教諭による授業「国際交流-実地の先生に学ぶ-」、「国際交流実践から学ぶ～ドクさんとの交流を通して～」の3回を実施し国際交流の実際多様性について学んだ。そして、世界の様々な人と美術の活動を通して人的交流を図る企画を実際の屏東大学でのワークショップ「play for...」(図8)に開花させた。一人一人の行為が自然に共通の記憶を形作る活動を試み、言葉を用いずとも相手の立場や気持ちを推し量って行動するなどコミュニケーション能力を十分に発揮させる場を作り上げ

た。帰国後、その成果をポスターにまとめ、平成 28 年 1 月 19 日～31 日こども美術館スカイミュージアム（あべのハルカス）において開催された「第 4 回 CGAT 展 図工の時間美術の時間」発表した。本展においては、会期中約 600 人の来客があり、専門を問わず広く美術や美術教育に関心のある人が来館し国際交流についての意見交換がなされ、本プログラムの展開のあり方を確認した。5）、9）、10）

- ・第 5 回（招聘） 平成 28 年 3 月 2 日～3 日 於：大阪教育大柏原キャンパス
屏東大学視覚藝術学系 学生 7 名、教員 2 名



図 9 展覧会鑑賞意見交換交流



図 10 書道パフォーマンス

平成 28 年 3 月 2 日～3 日、屏東大学の教員 2 名、学生 7 名が来阪し、2 度目の本学訪問交流を実施した。屏東大学は「台湾の美術」展（たまごギャラリー）を、また、本学は美術教育講座教員卒業生による展覧会（海岸通ギャラリーCASO）をお互いに実施した（図 9）。過去年度の「現代的教育課題とアート」受講学生なども参加して交流に加わった。また、「紙」を素材とした造形について展示発表交流、屏東大学学生自己紹介スライドショー、ワークショップ「台湾のお正月飾り」を実施し、本学学生による書道パフォーマンス（図 10）なども行った。立場を変えて交流することにより、それぞれの国の文化の違いを確かめ、よりよい交流の方法を探ることができた。5）、11）

3 年目は、参加学生に他学科の学生参加を得、さらにアートの可能性を広く捉える機会となった。プログラムを通じて、国際交流・国際理解教育の先進事例に直接触れたことによりこのプログラムの意味を再確認した。

屏東大学側からの来阪があった際、1 年目の交流から参加している学生の来訪などもあり、単年度でない継続的な交流が見られた。また、屏東大学側からは美術系学生だけでなく、日本語学科学生の参加（日本語研修も兼ねていると思われる）も多くあり、さらには、日本の他大学からの留学生との交流やサポートも受けるなど、重層的な交流がなされた。

- ・第 6 回（訪問） 平成 28 年 12 月 6 日～9 日 於：屏東大学

本学「現代的教育課題とアート」受講生 7 名、芸・音大学院生 4 名、教員 3 名



図 1 1 ワークショップ「Feel and Try」の実施の様子

「現代的教育課題とアート」受講生 7 名、芸・音大学院生 4 名、教員 3 名が、平成 28 年 12 月 6 日～9 日の 4 日間、屏東大学を訪問した。音楽の教員や大学院生の参加がありこれまでで最大人数での訪問となった。事前の特別講義では、国際的に活動する彫刻家による講義・ワークショップ、漢字教育の専門家による講義・ワークショップなどを実施し、学生のワークショップ企画立案の参考とした。訪問交流では、双方の学生自己紹介スライドショー、本学学生のワークショップ「Feel and Try-墨

香茶韻」（図 1 1）、屏東大学学生展示作品鑑賞意見交換、本学音楽専攻学生、教員によるコンサート実施（図 1 2）、少数民族の小学校訪問、少数民族文化研究などの充実した内容の訪問交流ができた。

これらのほとんどのプログラムは屏東大学の美術系および日本語学科の学生たちも同行し交流の広がりを見せた。協定校の屏東大学にとっても、大阪教育大との国際交流の機会を活用し学科内だけでなく、学科間の学生交流も意識して実施されていることがうかがわれた。



図 1 2 コンサートの様子

4年目は、本学美術領域だけでなく、音楽領域からの参加もあったことから、今後の双方の国際交流の広がりが期待される。「五感で感じ理解するコミュニケーション」の可能性を探ったワークショップでは、空間・時間を共有し交流を深める中で、言葉より先に全身で感じることの大切さを教えられた。もちろん言葉は大切なコミュニケーションツールではあるが、言語が道具ではなく相手をより知ろうとするきっかけの一つになることを実感した。このワークショップの記録については、平成 29 年 3 月 2 日に柏原キャンパスで行われた「附属学校園との研究交流会」において学生がポスターを作成し発表し、交流会には学生らも参加し自分たちの実践について客観的に振り返る場とした。

4、まとめと展望

本報告では、これまでの 4 年間、計 6 回の交流について簡単に記した。毎年の参加学生の感想からも招聘・訪問の交流本番だけでなく、事前学習・準備、事後のふりかえり活動などのプロセスを含めて国際交流実践の大きな意味があると改めて実感している。

国際交流のプログラムを通じて、参加した学生たちは、それぞれ主体的に独自の能力を発揮し活動した。これまで自覚していなかった自分に気づく機会であったり、新たな可能性の発見につながっている。

1 年目の自分自身やお互いを知ることから始まり、2 年目は協働して一つの事に取り組み、3 年目は両校学生自己紹介スライドショーへの発展、他学科学生との協働の展開、4 年目は交流内容の充実と他学科の国際交流展開へのきっかけなど、短期間ながら様々記憶される。

この取り組みにより、「言葉のみに頼らない国際交流・国際理解教育」という面から、グローバルな視野での美術活動や教育のあり方について考えることが出来てきた。学生の主体性をより引き出し今後さらに人的交流を図る目的においても継続的な交流を行っていききたい。何より参加学生たちが国際交流に積極的にかかわってくれるきっかけになることを願っている。

謝辞：屏東大学視覚藝術学系との国際交流実施にあたっては、交流当初の屏東教育大学、そして大学改編の繁忙な時期を経て、屏東大学の方々にお世話になってきた。お世話になった屏東大学の教員職員の皆様には改めて感謝申し上げたい。また、毎回交流の際、一生懸命サポートしてくれた学生の皆さんに心からお礼を言いたい。今後の交流においては、まだまだいろいろな面で試行錯誤が必要である。継続発展を目指していききたいと考えているので、関係の皆さまには、引き続きご指導ご鞭撻をお願いしたい。

注

- 1) 美術教育講座 2012 「「しょうぶ学園施設長 福森伸氏によるレクチャー」開催」
<http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~bijutsu/kiji/kiji48.html>
美術教育講座 2014『美術科研究』第31号特別号 pp34-39
リポジトリ <https://opac-ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/webopac/TD00027943> しょうぶ学園施設長 福森伸氏による講演「できる、できないってどういうこと」, 2014.03.31
美術科研究, 31, 34-39. <TD00027943>
- 2) 平成26年8月に国立屏東教育大学は屏東商業技術学院と合併し、国立屏東大学に名称変更された。以下、平成25年度の取り組みに関しては屏東教育大学、平成26年度以降の取り組みに関しては屏東大学と表記する。
- 3) 大阪教育大学 2013.6.20「国立屏東教育大学（台湾）と学術交流協定を締結」
http://osaka-kyoiku.ac.jp/university/kikaku/topics/2013_04_06/201305_24.html
- 4-1) 美術教育講座 2015『美術科研究』第33号 pp9-16
リポジトリ <https://opac-ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/webopac/TD00028342>
「美術教育講座・教育研究創造力アップ・グローバル・プロジェクト/生でふれよう日本の美術!プロジェクト」
渡邊, 美香, 2015.05.20. -- 美術科研究, 33, pp9-16
- 4-2) 美術教育講座 2015『美術科研究』第33号 pp27-41
リポジトリ <https://opac-ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/webopac/TD00028344>
「美術教育講座・教育研究創造力アップ・グローバル・プロジェクト報告」
渡邊, 美香; 加藤, 可奈衛, 2015.05.20. -- 美術科研究, 33, pp27-41.
- 5) 美術教育講座 2016『美術科研究』第34号 pp39-46
リポジトリ <https://opac-ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/webopac/TD00028979>
「美術教育講座・教育研究創造力アップ・グローバル・プロジェクト報告(2)」
渡邊, 美香; 出野, 文莉(張莉); 加藤, 可奈衛, 2016.07.20. -- 美術科研究, 34, pp39-46
- 6) 美術教育講座 2013 「国立屏東教育大學視覚藝術系の教員学生21名 来訪」
<http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~bijutsu/kiji/kiji64.html>
- 7) 美術教育講座 2013 「国立屏東教育大學（台湾）で学術交流」
<http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~bijutsu/kiji/kiji75.html>
- 8) 美術教育講座 2015 「CGAT展「図工の時間美術の時間」開催」
<http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~bijutsu/kiji/kiji109.html>
- 9) 美術教育講座 2015 「□□□□□□(□□)で□□□□」
<http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~bijutsu/kiji/kiji128.html>
- 10) 美術教育講座 2016 「CGAT展「図工の時間美術の時間」開催」
<http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~bijutsu/kiji/kiji129.html>
- 11) 美術教育講座 2016 「□□□□□□の□□□□9□□□」

<http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~bijutsu/kiji/kiji137.html>

日本語・日本文化研修留学生受入れの現状と課題 ープログラム充実に向けてー

長谷川 ユリ
国際センター 国際教育部門

1. はじめに

日本語・日本文化研修留学生（以後「日研究生」とする）は、海外の大学で日本語・日本文化に関する分野を主専攻とする学生を対象とした日本国政府の国費留学生制度である。日研究生は 10 月から翌年の 9 月まで 1 年間日本の大学で学んだ後、自国の在籍大学に戻ることにしている。日研究生は大学卒業後、再び日本国政府の奨学金を得て研究留学生として日本に戻ってくることが比較的多い。日本国政府の奨学金受給経験者が再び奨学金の申請をする場合、受給期間終了後次の採用時まで 3 年以上の教育研究の経歴が必要となるが、日研究生にはこの条件がないためであろう。元日研究生が日本への再留学等を経てさらに研鑽を重ね、日本に関する専門家として世界中で活躍していることは、各大学のフォローアップ調査等で明らかになっている。¹

本学では 1996 年度より日研究生プログラムを開始し、21 年目となる 2016 年度までに 139 名を受入れてきた。本学としては、国費留学生の中で、特に教員研修生とともに日研究生を重視し、できるだけ多くの日研究生に来てもらえるよう、様々な対策を講じてきた。その一方で、文科省の方針として留学生受入れ政策の一貫として日研究生に重点を置いてはいるものの、採用人数については年によって変動があり、その影響を本学も受けている。今後優秀な日研究生を受け入れるためには、大学のプログラム内容が重要なカギとなってくるはずである。本稿では、本学の日研究生受入れについて振り返るとともに、今後の課題について探っていきたい。

2. 日研究生制度の現状

日本国政府の国費留学生制度は 1954 年に始まったが、日研究生の制度が 1979 年に創設されたのを受け、東京外国語大学が 1980 年に初めて日研究生を受入れた。² 2017 年度募集要項によると、奨学金は毎月 117,000 円、渡日旅費と帰国旅費が支給され、入学検定料、入学金、授業料等は日本国政府が負担する。日研究生には、海外の日本国大使館を通じて募集を行う「大使館推薦」と、日本の受入れ大学が協定校から募集を行い文科省に推薦する「大学推薦」がある。大使館推薦も大学推薦も、研修は『日本語・日本文化研修留学生コースガイド』に掲載されている大学で実施される。文科省のホームページに掲載されている 2016 年度の日研究生受入れ大学数は 73 大学にのぼるが、リンクされている各大学の日研究生コースガイドを見ると、2016 年度に配置がなかった大学もあるようである。各大学は学部・学科の特徴や立地条件を生かして独自のプログラムを提供しているが、文科省が提示しているガイドラインに基づき、日本語や日本文化に関する授業を中心に、日本文化の体験も組み入れていることは共通している。一方で、授業が日研究生に特化したものかどうか、「見学・地域交流等の参加型科目」を実施しているかどうか、何が修了要件となっているかについては大学によって違いがある。

¹ 大阪大学日本語日本文化教育センター編（2016）

² 鈴木（2006）

日研究生の採用人数については、2016 年度に大きな変化があった。国費留学生の採用人数は予算等の状況により変動があるが、2016 年度は 323 人と、2015 年度の 595 人から 6 割以下に減少した。2008 年度～2011 年度までは 261 人～304 人で推移しており、2012 年度から 2015 年度にかけての 4 年間は 468 人～604 人に増加したのであるが、2011 年以前の規模程度に戻ったことになる。³ 2012 年に採用人数が増えたのは、2011 年度までは受入れ大学が国立大学と一部の私立大学に限られていたのに対し、2012 年度に全国の国公立大学、私立大学から公募される方針に変更されたこと⁴と関係があるだろう。もし今後採用人数が 300 人前後で推移するとすれば、各大学の受入れ人数や受入れ大学数にも変化が起こるであろう。また、2015 年度より、日研究生を受入れている大学にはフォローアップ調査が課せられることになった。国費留学生に対するフォローアップは以前より求められていたが、国費留学生の中でも日研究生は日本と出身国との交流に貢献できる人材となることが期待されるためである。フォローアップの結果が推薦可能枠に反映される仕組みとなっており⁵、日研究生を受入れる大学にとって、プログラム内容を充実させるだけでなく、日研究生に対する継続的なフォローアップを行うことが重要な課題となっている。

3. 大阪教育大学の日研究生受入の歩み

大阪教育大学ではこれまでに 39 カ国・地域（返還前の香港を含む）の 139 人の日研究生を受入れており、1996 年度から 2016 年度までの推移は表 1 の通りである。前節で述べたように、2012 年度から 2015 年度までは日研究生全体の受入れ人数が増加したことから、本学でもその間は大使館推薦の人数が大幅に増えたが、2016 年度には 6 名と前年度の半分以上に減った。

年度	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006
人数	3 (0)	3 (0)	4 (1)	4 (1)	6 (2)	6 (1)	6 (3)	5 (2)	7 (3)	2 (1)	8 (2)

年度	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
人数	2 (1)	7 (2)	3 (3)	2 (0)	7 (1)	10 (1)	15 (1)	17 (1)	16 (1)	6 (2)

表 1 大阪教育大学の日研究生受入の経緯 ※()内は大学推薦

これまで受入れた日研究生の実績を地域別にまとめたのが図 1 である。

³ 大阪大学日本語日本文化教育センター編（2016）

⁴ 有田（2013）

⁵ □□□□□□□□□□□□□□ センタ□□（2016）

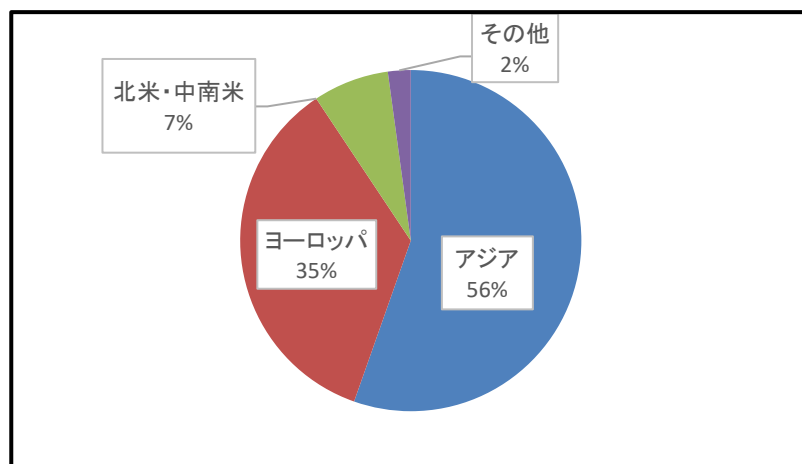


図1 本学の日研究生受入実績（地域別割合）

アジアで多いのはタイ、中国、ベトナム、カンボジアであるが、タイと中国は大学推薦が多い。2008年以降はキルギス、タジキスタン、カザフスタンといった中央アジアから、2014年以降はインドやスリランカといった南アジアからの留学生が配置された。ヨーロッパで比較的多い国はロシア、ポーランド、ドイツ、ウクライナである。ドイツは全員大学推薦であった。「その他」はオーストラリア、ニュージーランド、エジプトである。2016年11月現在の本学の留学生数140人のうち9割以上がアジア出身であることを考えると、日研究生はアジア以外の地域の割合が多く、留学生の多様化をもたらしていることが分かる。

これまでのフォローアップ調査で全ての学生の動向を把握している訳ではないが、48人が何らかの形で日本に戻ってきており、うち11人は研究留学生として日本への再留学を果たしている。まだ在学中の学生を除くと、約40%以上が再来日しているという結果となっている。また、日本に戻って来ない元日研究生のうち15人は日系企業の通訳等、日本に関わる仕事をしている。まだ連絡が取れていない学生もいるため、今後データを整備してアンケート調査を実施し、正確な情報を得ることができれば、帰国後どのように日本と関わっているのかということがさらに明らかになるかもしれない。

次に、プログラム内容の充実・拡充について触れたい。この21年の間に少しずつ整備してきたが、大きな転換点となったのは、日研究生の配置人数が少しずつ増えてきた2005年度にカリキュラム改正を行ったことである。日本語の授業以外に「日本の社会と文化」「日本の言語と文化」「日本文化研究」を新設した。「日本文化研究」は指導教員の指導のもとに修了レポートを作成するために設けた科目で、「日本文化研究」履修が日研究生の修了要件となった。2008年度には修了レポート発表会で発表することが義務づけられた。日研究生の科目として、2009年度には「日本文化史」、2010年度には「日本近現代史」を開講した。また、2005年度には、それまで留学生のための授業だった「日本事情」を廃止し、日本人も受講可能な「日本事情」「国際理解」を新設した。留学生が日本人とともに学ぶ科目としては、2006年度には「東アジア言語文化論」、2010年度には「日本科学技術史概論」も開講した。さらに、「見学・地域交流等の参加型科目」として、2011年に「大阪の文化」、2013年度には「日本の伝統文化」2014年度には「文化交流実践研究」を新たに設け、日研究生が日本文化を体験的に学べるように工夫を重ねた。

2017年度に向けてカリキュラム改正を行い、日研究生の授業を以下の通り整備した。

＜日本語科目、日本文化に関する科目＞

- ・N1～N3までの様々なレベルに対応するために、それぞれ6コマ程度の授業を準備。

<体験型授業>

- ・大阪の文化Ⅰ、大阪の文化Ⅱ（フィールドワークと講義を組み合わせた授業）
- ・日本の伝統文化Ⅰ（剣道、陶芸、日本の音楽）、日本の伝統文化Ⅱ（書道）
- ・文化交流実践研究（自国文化の発表、学校見学や児童生徒との交流）

<日本人と学ぶ授業>

- ・日本事情
- ・国際理解
- ・日本科学技術史概論
- ・その他、実力に応じて日本人学生向けに開講している授業を受講

<修了レポート>

- ・日本文化研究

4. 日研究生は何を学びたいと思っているか

日研究生は具体的にどのようなことに関心を持っているのだろうか。日研究生が実際に興味を持っていることを、2015年度日研究生の修了論文から探ってみたいと思う。前節で述べたように、日研究生は修了レポートを書くことが義務づけられており、指導教員の指導のもと、ほぼ1学期にわたってレポート作成にのぞむ。10枚にまとめたレポートを提出し発表すると、2単位が与えられる。評価は、レポートが80%、発表が20%である。

2015年度の修了レポートのタイトルは表2の通りである。

日本語 日本語教育	インドのティラクマハラシュトラ大学における日本語教育—アンケート調査を中心に—
	日本語における謝罪表現
	大阪弁についての一考察
	大阪弁と共通語の使い分け
日本文学	『平家物語』和歌と叙情
日本文化 日本社会	外国人観光客に対する関西観光戦略
	大学生と読書
	日本の鉄道「駅・施設」（近畿日本鉄道）
	日本の学生のアルバイト
	日本に女子大が必要か
	書道
	日本のアイドルとファンの関係性とマーケティング戦略
日本と自国文化 の比較	日本とインドネシアの腐女子
	高齢者の生活—日本とカンボジアの比較—
	日本とカンボジアの視覚障がい者の現状と教育のかかわり
	ミャンマーと日本の携帯電話サービスと大学生のスマートフォン使用実態の比較

表2 2015年度日研究生修了レポートのタイトル一覧

日本に来る時からテーマが決まっている学生もいれば、日本に来てから気づいたことをまとめた学生もいる。国の大学での教育内容や日本語力に差があり、スタートラインが異なるため、到達点や目標も自ずから違ってくる。論文を書いたことがないため、関心はあっても論文に結びつかない学生もいた。ここ何年か、必ずと言っていいほど「関西弁」または「大阪弁」について書く学生がいるのは注目すべきことである。この年も2人の学生が「大阪弁」をテーマに選んだ。

そこで、次に大阪という地域で学ぶ意義について考えてみたい。日研究生が日本社会や文化に対して興味を持つのは当然であるが、大阪を留学先に選ぶ日研究生はどのようなことに関心があるのだろうか。大阪という地域は日研究生にとってどのような魅力があるのであろうか。本学に来る学生はもともと大阪に来たかったのであろうか。ここでは、2015年度の日研究生から帰国前に聞き取ったことを中心にあとめてみよう。

日研究生たちには、2016年9月の修了証書授与式のあと集まってもらい、気楽な懇談会を開いた。16名のうち13名が出席して、プログラム全体の感想や要望を出してくれた。参加した学生の出身国はカンボジア、ミャンマー、ベトナム、インドネシア、インド、ウクライナ、チリである。13名のうち、8名の学生が大阪（関西）に来たかったと応えた。前にも関西に来たため関西を選んだ、もともと関西に興味があったという学生もいたが、6名は先輩から聞いて大阪教育大学を選んだと応えた。どちらかと言うと、たまたま興味のある大学が関西にあったとも言える。大阪市内ではなく郊外にある本学の環境については、「初めは田舎でがっかりした」「本当は東京のほうがよかった」と正直に話してくれた学生もいたが、「田舎だが住むのにちょうどよい」と言う学生もいた。全般的に言うと、最終的には大阪、関西に来てよかったと思っている学生が多いようであった。

2015年度の日研究生には、プログラム内容についても聞いてみた。主な意見は次の通りである。

- ・大阪弁の授業があるとよい。
- ・最初のころ、大阪弁が分からなくて苦労したので大阪弁の授業があったらよい。
- ・N1, N2の文法のクラスがあるとよい。
- ・国で文法を学んだとしても、実際にどのように使うのか知りたい。
- ・日本語能力試験のクラスがあればよい。
- ・論文の書き方のクラスがあるとよい。
- ・日本人と一緒に授業だと難しすぎるので、留学生のための授業があってよかった。
- ・日本人と一緒に授業があってよかった。
- ・国語の授業では日本人学生が言語学についての知識がなかった。
- ・留学生のためのプログラムが充実していた。
- ・国では試験が全てだった。発表やディスカッションがあってよかった。
- ・「日本の伝統文化」の授業や「文化研修」などで日本文化について学べてよかった。
- ・自分の国の文化を紹介する機会があり楽しかった。
- ・住むところに家具があってよかった。他大学では家具がそろっていないところもある。

大学としては、体験型の授業や日本人学生との協働の授業を充実させることが重要な課題だと考えているが、基礎的な日本語力を身につけたいと思っている学生が予想以上に多かった。関西弁についてもリクエストが多かった。国ではあまり訓練を受けてこなかったスキルに関して、もっと学びたいという声

もあった。その一つが、レポートを書くのが初めてのため、書き方について学びたいということである。発表やディスカッションなど、国と異なる授業のやり方については、勉強になったという意見も出た。さらに、日本人学生と一緒に学ぶことについて意見が分かれたことも興味深かった。これらの意見を全て2017年度の授業に反映させることは難しいが、今後のプログラム作りの参考にしたいと考えている。

5. 今後の課題と展望

日研生にとって、1年間という限られた時間の中で効果的に学ぶことは非常に大切である。日本で生活するだけで日本語が上達し、日本社会に対する理解が深まるかもしれない。しかし、大学のプログラムの中で学ぶ意義のあることも多いはずである。これから考えていくべきポイントは次のようにまとめられる。

- 1) 日本語のどの部分をどのように強化すべきか。
- 2) 日本文化をどのように授業で学んでいくか。
- 3) 参加型・体験型授業をどのように組み立てていくか。
- 4) 留学の成果をどのように修了レポートにつなげるか。

大使館推薦の日研生の配置先は最終的には文科省の判断となるが、学生の留学希望先はある程度反映されることになっている。本学に来たい、大阪に来てみたいと学生に思ってもらえるような魅力的なプログラム作りをこれからも進めて行きたい。

参考文献

有田節子（2014）「初めての日本語・日本文化研修生の受け入れーその意義と課題ー」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』第4号: pp.59-65

鈴木智美（2007）「日本語・日本文化研修プログラムー東京外国語大学における日研生プログラムの現状と展望ー」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』33: pp.149-167

長谷川ユリ（2012）「体験学習を通じて学ぶ日本ー日研生のための授業「大阪の文化」を例としてー」『大阪教育大学国際センター年報』第18号: pp.2-7

大阪大学日本語日本文化教育センター編（2016）『日本語・日本文化研修留学生問題に関する検討会議（第22回）報告書』

文部科学省ホームページ「日本語・日本文化研修留学生コースガイドー

覧」 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2016/02/09/1365867_04_1_1.pdf

台湾の小学校における円周率の教育と数学史*

城地 茂

国際センター 国際事業部門

1. 緒言

台湾は、日本同様に資源が少なく、教育によって人材を育成することによって、近代化を達成した地域である。特に I T 産業を中心とした電子産業の発展が目覚ましく、2016 年 8 月 12 日には、台湾の ^{Hong h a i} 鴻海精密工業によるシャープ買収のニュースは記憶に新しいところである¹。こうした技術を支える理系の教育には力を入れている。特に、高等技術教育には、学位を授与できる機関が、教育部（「部」は、日本の省に相当し、文部科学省に相当）高等教育司（「司」は日本の局に相当）の大学・学院（単科大学）だけではなく、技術及職業教育司が所轄となっている科技大学・技術学院（単科の科技大学）として存在している²。

筆者は、2016 年 10 月 19 日から 22 日にかけて、高雄師範大学附属高級中学付設国民小学部での海外教育実習を引率するために台湾へ渡航した。この機会に、本稿では、台湾の小学校に科学技術教育を見るために 6 年生の「数学³」における円周率の教育について、中国数学史の観点から報告したい。

2、高雄師範大学附属高級中学について

(1) 台湾の教育制度と教員養成

台湾は、日本と同じ、6・3・3・4 制である。これは、戦前は日本の統治下にあり、台湾総督府の管轄であるが、似た教育制度を敷き、戦後は、アメリカの制度を導入したので、歴史的に極めて近い状態だからである。

日本との差異では、高校から複線教育になっていた、ある意味では、戦前の体系が残っていたことが挙げられる。これは、全国統一試験⁴で、普通科高校（高級中学）、実業高校（高級職業学校）、高等専門学校（5 年制専科学校）への進路が決まり、その後コースを変更は、編入試験の枠が少ないため、非常に難しくなっていた。普通科高校（高級中学）、実業高校（高級職業学校）、高等専門学校（5 年制専科学校）への進路が決まり⁵、その後

* 本稿は、科学研究費補助金、基盤研究（C）課題番号 22500962（代表者・城地茂）の補助を受けた。

¹ 鴻海精密工業股份有限公司は、3888 億円の出資金により、シャープの議決権の約 66% を握る親会社となった。

² 台湾・教育部統計処の統計「大專校院名録」http://stats.moe.gov.tw/files/school/105/u1_new.xls によれば、一般大学・学院 64 校に対し、技術職業系大学・学院は 86 校になっている。なお、師範系大学 6 校は別枠になっている。また、これは、教育部の統計なので、軍、警察の高等教育の学位授与機構が 7 校ある。

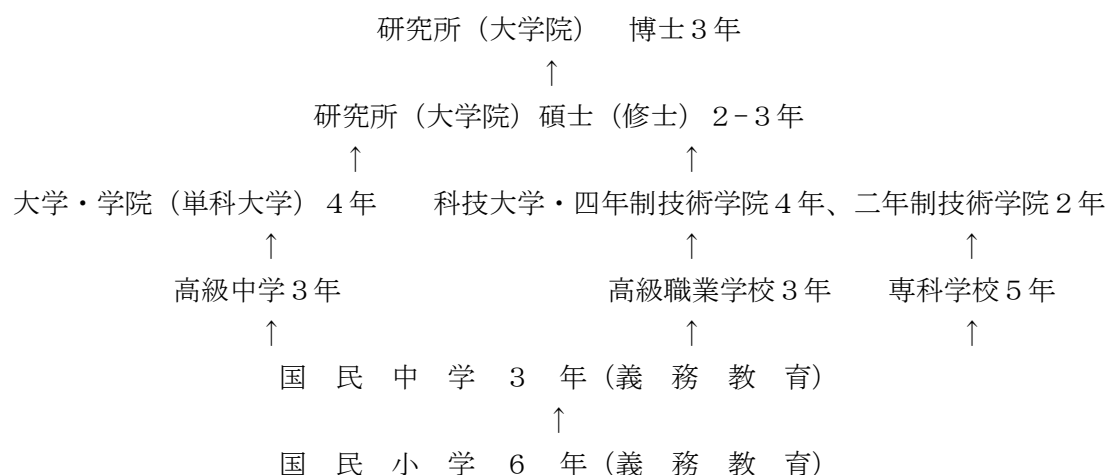
³ 台湾では、小学校の教科も算数ではなく「数学」である。中国では、「算数」という名称は、成立年が明らかになっている数学書では最も古い『算数書』（著者不明、BCE186 年ごろ）でも使われていた（城地茂（1988）、城地茂（2001a）、城地茂（2001b）、郭書春・城地茂（2003）を参照のこと）が、近代（1911 年以降）以降では、使われていない。

⁴ 7 月上旬に行なわれる統一試験（「公立高級中學聯合招生考試」「高級職業學校聯合招生考試」「五年制專科學校聯合招生考試」）により進路が決まった。

⁵ 初等教育の教員養成は、1945-1960 年は「師範学校」、1961-1986 年は「師範専科学校」、

コースを変えるのは、相当な困難を有していた。しかし、2014 年に「十二年国民基本教育」が実施され、高校の学費無償化、無試験入学であるが、義務教育のような強制ではないということになり、こうした制度も変貌しつつある。

表 1 台湾の教育制度



教員養成制度も変遷を重ね、2016 年現在では、教職課程（教育学程）を履修することによって取得の道が開ける開放性を有している⁶。しかし、1994 年に『師資培育法⁷』が改正されるまでは、計画的な養成であり、現在の名称で言えば、師範大学が中等教育の教員養成、教育大学が初等教育の教員養成と明確に分かれていた。

現在の師範大学は師範類の大学で、中等教育の教員養成が目的であった。日本統治時代は、台湾には高等師範学校や文理科大学がなかったため、戦後に設立された師範学校を前身としている。

高雄師範大学は、台湾全土に 3 校しかない師範大学の一つで、1954 年に創立された台湾省立高雄女子師範学校が前身である。そして、附属学校は、中等教育の教員を養成する目的なので、高雄師範大学附属高級中学 1 校だけを本部のある和平キャンパスに隣接した地に有している。附属高級中学は、高雄師範大学学生の実習を行うのが主たる役割であるが、附設国中部（中学校部）、附設国小中部（小学校部）と教育実習を行えない学校部も有している。

本学の大学院では、姉妹校である高雄師範大学の附属高級中学で英語を用いて海外・他地域学校実習を実施している。英語の理解度という点では、高校の方が実施しやすいが、外国語を使うという制限の中では、小学校で実施する方が有用である。6 時間程度の教育

1987 年以降は「師範学院（単科大学）」や総合大学の教育学院（教育学部）などと変遷している。中等教育の教員養成は、1946 年に現在の台湾師範学院（単科大学）以来、高等教育機関で行われていた。

⁶ 大学在学中に教育学程をするが、幼稚園 26 単位、小学校 40 単位、中高 26 単位で、在学中に 54 時間（2-8 単位）の実習を含む。更に、大学卒業後半年の「実習学生」（無給、学費必要）に修了し、教育部の教師資格検定試験に合格しなければならない。その上で、各県、市の採用試験（私学の場合、各校の採用試験）に合格して、やっと教員になれるという狭き門である。

⁷ 1979 年に制定された『師範教育法』を改名したものであり、この間は、公費（学費無料、生活費補助）で計画的に養成され、配属先が決まらないということではなかった。

実習を行っている。異なる文化背景の子どもたちに対する授業を企画することができ、教職に対して新たな意味づけをすることができる。また、専攻が異なる大学院生間で協力して、専門以外の教科や内容にも積極的に踏み込み、授業を立案・実施することで異なる人たちと協働できる力を身につけるなど、効果的な教育実習を実施している。

国際センターでは、大学院に計画当初から協力し、2017 年 3 月現在で、すでに 4 期生が実習を終えて、5 期生が 2017 年 10 月の教育実習の準備を進めている。筆者は、1 期生の準備段階から、いわば 0 期生から同行し、教育観察実習にも参加した。

そこで、本稿では、小学校 6 年生⁸の数学における円周率学習について、数学史の立場から論じることにした。

3、数学史研究と数学教育について

教科書は、李源順（主編）（2016）『数学 6 上』台南：南一書局。（初版）を用いていた。附属学校という特殊性もあって、担当教員が教科書の決定に寄与するところが多いが、これは、一般の公立学校でも、教員の裁量権が大きく、教えやすく、効果の上がる教科書の選択が行えるとのことであった。

本稿の冒頭で述べたように、台湾では IT 教育が進み、教室にはパソコンとプロジェクターや電子黒板が固定設置されており、USB メモリーに教材を入れておけば、容易に使用できる環境にあった。これは、公立学校でも進んでいる。円周率の単元は、可視的教材が有用になってくる。そこで、教員は、教科書に付随している副教材の有用さ、豊富さが教科書選択の大きな要素になると語っていた。

円周率ではないが、三平方の定理（漢字文化圏では、「ピタゴラス-商高⁹の定理」）を説明するものを見せていただいた。面積図がパソコン上で移動するのであるが、ギリシアのやり方ではなく、『周髀算経』のやり方をビジュアル化したものもあり、生徒には親しみを持って過去の数学者と臨むことができるようになっていた。

なお、小学校 6 年上の単元は、

- 1 素因数分解と短除法
- 2 分数の除法
- 3 小数の除法
- 4 比例と正比例
- 5 円周率と円の面積
- 6 扇形の面積
- 7 概算
- 8 速度
- 9 形体関係と柱体の表面積
- 10 等量公理

となっている。

⁸ 附設小学校部なので、各学年 1 クラスずつで、このクラスで教育実習を行うために、2016 年 10 月 20 日に数学の授業（台湾は 8 月 1 日から新学年度が始まるので、前期に相当）を見学した。

⁹ 『周髀算経』（著者不詳、BCE50 年ごろ）で三平方の定理を解説する数学者。

ここでは、児童（台湾では、小学生でも「学生」としているが）、直径と円周を測らせることで、実際に円周率を計算させ、円周率を理解させるというものである。

これも、副教材として、ミシン目が入った紙製の円が用意され、児童は、はさみを使わなくても、短時間で円を入手できるようになっている。こうすることによって、円を転がすにせよ、糸やひもを巻き付けるにせよ、滑りにくくなるのである。実際、教員が、測る方法を発問していたが、円を転がしたり、ひもを巻き付けるという回答が多かった。一人、ミシン目の数を数えて長さを測る、と答えた児童の回答が印象的であった。

その際、円の直径は、9 cm になっている。これは、計算をさせるために、10 cm にせず、9 cm にしたということだろう。児童が操作しやすい大きさとなると、このぐらいであろう。また、表 2 にあるように、mm 以下の目盛りの読みやすさを勘案したものと思われる。

表 2 直径と円周の表

直径 (mm)	円周 (mm)	直径 (mm)	円周 (mm)
10	31.41592654	55	172.7875959
15	47.1238898	60	188.4955592
20	62.83185307	65	204.2035225
25	78.53981634	70	219.9114858
30	94.24777961	75	235.619449
35	109.9557429	80	251.3274123
40	125.6637061	85	267.0353756
45	141.3716694	90	282.7433388
50	157.0796327	95	298.4513021

ここで、直径 7 cm について考えてみたい。円周は、22 cm に近くなるのだが、この値、22/7 は、中国でも良く用いられた近似値である。この数値は、『隋書』律曆志にもあり、日本へも伝わっている。祖沖之（429-500）の『綴術』（散逸）は、大宝律令の規定でも、大学寮で算生に学ばれていたことが記述されているからである¹⁰。

古之九數，圓周率三，圓徑率一，其術疏舛。自劉歆、張衡、劉徽、王蕃、皮延宗之徒，各設新率，未臻折衷。宋末，南徐州從事史祖沖之，更開密法，以圓徑一億為一丈，圓周盈數三丈一尺四寸一分五釐九毫二秒七忽，朒數三丈一尺四寸一分五釐九毫二秒六忽，正數在盈朒二限之間。密率，圓徑一百一十三，圓周三百五十五。約率，圓徑七，周二十二。又設開差冪，開差立，兼以正圓參之。指要精密，算氏之最者也。所著之書，名為綴術，學官莫能究其深奧，是故廢而不理。¹¹

このように、祖沖之は、内接多角形の外周を測るという劉徽（263 年ごろ、『九章算術』（著者不詳、CE50 年ごろ）に注釈をほどこした）の方法を物理的に大きくして、3.1415926

¹⁰ 城地茂（1987）参照。

¹¹ 『隋書』□□ 11 「□□□」・□□、中華書局本 pp.387-388。

と 3.1415927 の間に円周率があることを計算し、さらに、近似分数として、「約率」22/7 と「密率」355/113 を求めている¹²。これは、先に述べた『綴術』に記述されていたようである。

また、数値としては、22/7 が江戸時代に流布した『算法統宗』（程大位、1592 年）にあり、伝えられていた。ただし、祖沖之の「約率」が『算法統宗』「密術」となっている¹³。

いずれにせよ、日中ともに、22/7 は、手軽に近似値として歴史的に重宝されていた数値である。これを体感するのも、悪いことではないように思う。また、わずかに 2.2 cm を欠けるのが見て取ることも、条件によっては分かるのではないかと期待している。

4、「円周率は 3」

「円周率は 3」という文言は、2002 年度実施の小学校学習指導要領の改訂にともなって、日本の算数教育の現場を思い起こさせるものである。計算の桁数と円周率の単元の整合性を考えると、筆算では円周率を 3 とすることになってしまうというものである。電卓を用いれば、3.14 の数値を用いることが可能ではあった。

ただ、円周率 3 という数値は、『九章算術』（著者不詳、CE50 年頃）の本文では、用いられているし、その由来が円の内接六角形だと劉徽もその注釈で述べている¹⁴。劉徽はその上で、12 角形、24、48・・・192・・・3072 と三平方の定理を使って内接多角形の計算を続け¹⁵、3.14 までは間違いない数値としているから、3.14 という数値は、1700 年以上の伝統のある数値と言える。3.1 でもなく、3.141(2)でもなく、3.14 である。

5、まとめに代えて 「円周率が、3.16？」

最後に、まとめに代えて、数値について日本数学史の興味深い事実を紹介したい。日本でも、円周率の近似値として、3.16 を用いていたという史実である。『塵劫記』（吉田光由、1627 年）という、江戸時代に最も流布した和算書の中で、円周率 3.16 を紹介している。『塵劫記』は先に紹介した『算法統宗』を種本にしたと序文で述べられている。内容的には、その通りかどうかは、議論の分かれるところであるが、少なくとも、『算法統宗』を目にしたのは間違いない。そして、『算法統宗』には、22/7 が示されており、3.14 に近い数値を知っていたのである。しかし、敢えて、その数値を用いず、3.16 という数値にこだわったのである。

3.16 は $\sqrt{10}$ の近似値ということは、一目瞭然である。この数値を用いると、直径から円周を求めるとき以外にも、円周から直径を求める場合でも、割り算ではなく掛け算で解決

¹² これには、ユークリッド（エウクレイデス）の互除法に近い方法が『算数書』では述べられ、『九章算術』では、「更相減損」法とされ、中国数学には連分数の概念はないが、数値的には同じ計算で求めることができる。これによって、22/7、355/113 という分数を求めることができる。また、天文学的計算方法でも可能である（曲 安京（著）城地 茂（訳）（2002）参照）。

¹³ 19 巻本、巻 3、18 丁裏（任継愈（他編）（1993）, 2:1272）。

¹⁴ 『九章算経（術）』（上海図書館蔵、嘉定 6（1213）年版）巻 1、11 丁裏。（文物出版社、1980 年復刻本による）。劉徽は、六角形ではなく（角の概念が希薄）、「六觚（辺）形」と表現している。

¹⁵ 劉徽は、3072 角形まで計算をしたとしているが、実際に数値を挙げているのは、192 角形までである。算木による計算は、電卓のような浮動小数点ではないので、誤差が蓄積し、1536 角形では、3.141504 となるが、3072 角形では、3.140960 と値が悪くなってしまう（城地茂（1989）参照）。

できるのである¹⁶。

すなわち、

$$\text{直径} \times \pi \div \text{直径} \times \sqrt{10}$$

で円周が求められる。

逆に、円周が分かっているで直径を求めたいとき、3.14 を使っていれば、3 桁の割り算をしなければならない。これは、前節で論じた「円周率は3」に通じる計算上の問題点でもある。ところが、円周率の近似値を 3.16 とすれば、

$$\text{円周} / \pi \div \text{円周} / \sqrt{10} = \sqrt{10} \quad \text{円周} / 10 \div \text{「円周率 (3.16)」} \times \text{円周} / 10 \div \text{直径}$$

分母が有理化できて、円周に「円周率」を掛けて、10 で割ったものが直径になるのである。

3.16 の表作っておけば、作業現場でも容易に計算ができ、眼鏡橋などを作るときに、直径の概算を素早くできるのである。実際の実務では、1 % 程度の誤差は安全率を大きくとれば、問題は少ない。実際に、小学生が測っていた数値でも、この程度の誤差は出てしまう。

実測するのであれば、こうした日本数学史上の史実も紹介することも、子供たちに、算数・数学を神話の世界ではなく、身近なものとして引き寄せることができるかもしれないと、感じた。数学の時間では難しいとしても、色々な考え方を紹介するのは子供たちの発達に無益ではないだろう。

¹⁶ 城地茂 (2014) :171-173

参考文献

- 山崎 直也(2001)「九年国民教育政策の研究—戦後台湾教育の二面性の起源に関する考察」『日本台湾学会報』3:50-69.
- 城地 茂(1987)「律令期の数学教育」『数学史研究』112: 13-21.
- 城地 茂(1988)「□□□□□□□□□□□□□□『算数書』について」『数学史研究』117: 21-25.
- 城地 茂(1989)「祖沖之『大明暦』与円周率計算」『北京師範大学学報(自然科学)』1989-4: 85-89.
- 城地 茂(2001a)「算数書日本語訳」『和算研究所紀要』4:19-46.
- 城地 茂(2001b)「『算数書』成書年代初探」『世界華人科技史研検討会論文集』129-138. (中国語)
- 郭 書春・城地 茂(2003)「『算数書』と中国数学パラダイム」『数学セミナー』429:62-65.
- 城地 茂(2003)「台湾における日本統治時代の珠算教育」『台湾応用日語研究』1:1-24.
- 城地 茂(2012)「台湾における教育実習の法制と実態」『(大阪教育大学) 国際センター年報』18:8-14.
- 城地 茂(2014)『和算の再発見』化学同人.
- 城地 茂(2016)「台湾における数学学会の交流」『(大阪教育大学) 国際センター年報』20:4-9.
- 曲 安京(著) 城地 茂(訳)(2002)「祖沖之は如何に $\pi = 355/113$ を得たか」『(京都大学) 数理解析研究所講究録』1257: 163-173.
- 任継愈(他編)(1993)『中国科学技術典籍通彙』5巻、鄭州: 河南教育出版社.

日本語の授業におけるディベート活動の試み ー2016 年度後期 時事日本語Ⅱ 実践報告ー

古川 敦子
国際センター 国際教育部門

1. はじめに

本稿では、2016 年度後期の国際センター開講科目、時事日本語Ⅱで実施したディベート活動について報告する。

外国人留学生を対象とした日本語の授業では、日本の社会についての理解とともに、大学での学業に必要な日本語口頭能力や文章表現力の向上を目指している。また、近年はアクティブラーニングの観点から、あるテーマについて自分の考えを述べ、他者の意見を聞き取り、対話によって理解を深めるという力の育成も求められている。これまで筆者が担当したニュースや新聞等の時事問題を扱う授業では、留学生は使用されている語彙・表現を学習して内容を理解する、そして自国の状況と比較しながら感想を述べるという活動が多かった。このような活動も大学の留学生として必要なものではあるが、テーマについて深く掘り下げて理解するまでには至っておらず、また様々な文化的背景を持つ留学生同士が対話できるという「強み」を活かしきれないのではないかと感じていた。

そこで、時事日本語Ⅱの授業では、ニュースや新聞の時事問題を扱う活動の中に、ディベートを組み込むこととした。ディベートとはあるテーマについて一定の時間制限のもと、聴衆者を説得することを目指して肯定側と否定側が議論をする活動である。単なる意見交換としてのディスカッションとは異なり、自分の主張を根拠を示しながら、そして相手に反論しながら論理的に説明していくことが求められる。その活動の過程において学生間のインタラクティブな交流が促進され、様々な角度からテーマを捉える力がつくと考えられる。これまで大学の講義にディベートを取り入れる実践例（服部 2003、呉他 2016、和井田他 2016 等）、また留学生対象の日本語科目でディベートを行っている報告（高橋 2015、西谷 2001 等）も多く見られ、思考力やチームワークのスキル、口頭表現力向上の効果が示されている。

本稿では、時事日本語Ⅱのディベート活動実践について記述し、最終回に実施したアンケート調査の回答から学生がこの活動をどのように捉えたかについて考察する。

2. 時事日本語Ⅱ 授業概要

時事日本語Ⅱは日本語・日本事情科目の一つであり、筆者が担当している。2016 年度後期の履修者は交換留学生と日本語日本文化研修留学生のうち、日本語力が中上級～上級レベルと判断された学生 12 名である（表 1）。

表 1 2016 年度後期 時事日本語Ⅱ 履修者

	出身地域（人数）
交換留学生 9 名	韓国（3 名）、中国（3 名）、台湾（3 名） ※ 2016 年 4 月来日 1 名、10 月来日 8 名
日本語日本文化研修留学生 3 名	中国、カンボジア、ベトナム（各 1 名）

本授業では、現在日本で話題になっている時事問題のニュースを十分に聞き取る力を習得すること、

そしてその内容について、自らの意見を日本語で述べたり、書いたりする力を伸ばすことを目的としている。通常の授業では、聴解の教科書を使った学習とインターネットのニュースの視聴・話し合い活動を行った。以下、授業内容を簡潔に説明する。

● 聴解の教科書を使った学習（授業前半）

使用教科書は、「ニュースの日本語聴解 50」¹である。ここでは主にニュースで頻繁に使われる語彙や表現を学習し、聞き取りの力を伸ばすことが目的である。授業ではまず教科書（CD）のニュースを聞いて、その内容、語彙、表現を学生同士のペアで確認し合う。その後、全体で理解を確認し、重要語彙や表現の意味と使い方を学ぶ。3 課ごとに復習クイズを実施して理解の定着をはかる。

● インターネットのニュースの視聴・話し合い活動（授業後半）

毎回、担当講師がインターネットのニュース動画や文字資料、新聞記事を準備する。授業ではまずニュースに関連する動画を視聴し、次に資料や記事を読んで内容を確認する。そしてニュースについて 3-4 人のグループで意見交換を行う。毎回のニュースの内容の要約を書くことが課題として出される。

この活動は、ニュース視聴や読み取りを通して、現在日本でどのようなことが話題になっているかを知るとともに、その内容に関する自分の意見を述べることを目的とする。この活動の概要を表 2 に示す。

表 2 インターネットのニュース視聴・話し合い活動概要

回	月/日	授業内容（授業で取り上げたニュース・記事のタイトルなど）
1	10/5	「台風 18 号北上、4 日夜には九州北部へ」（TBS News i）
2	10/12	「医療通訳の養成講座 4 万人余の外国人暮らす群馬で」（NHK NEWS WEB）
3	10/19	「近鉄大阪線の駅でホームから転落、視覚障害の男性死亡」（TBS News i）
4	10/26	「ハロウィーンで交通規制、渋谷駅周辺を歩行者天国に」（TBS News i）
5	11/9	グループ・ディスカッション① ハロウィーンでの交通規制について考える
6	11/16	「AI＝人工知能の最前線、世界を変えるディープラーニング」（TBS News i）
7	11/30	「相次ぐ食の産地偽装 一部業者の不正でブランドに」（産経ニュース）
8	12/7	「モデルは平均 72 歳 神戸でシニアファッションショー」（産経ニュース） 「1 日 100 円の“広場” 世代超えた交流拠点に」（神戸新聞 NEXT）
9	12/14	グループ・ディスカッション②-1 ブランドの価格差について考える
10	12/21	グループディスカッション②-2 ブランドの価格差についてグループ同士で話し合う
11	1/4	「カジノ法が成立 未明に衆院可決」（朝日新聞 DIGITAL）
12	1/11	「成人の日 123 万人が新成人、各地で祝う式典」（TBS News i）
13	1/18	プレゼンテーション準備①（グループワーク）
14	1/25	プレゼンテーション準備②（グループワーク）
15	2/1	ディベート式プレゼンテーション

¹ 瀬川由美他『ニュースの日本語聴解 50—中級後半 - 上級レベル』（スリーエーネットワーク）

上記の表 2 の活動のうち、第 5 回 (11/9)、第 9・10 回 (12/14・21)、第 13 回~15 回 (1/18~2/1) がディベート活動に関する授業である。

3. ディベート活動

本授業は日本の時事問題を扱う授業であるため、ディベートのテーマは授業で取り上げたニュースのトピックに関するものとした。また、履修する学生がディベート活動の経験がないことを考慮して、第 5 回 (11/9)、第 9 回 (12/14)、第 10 回 (12/21) にグループでのディスカッション・発表を行い、第 15 回のディベート式プレゼンテーション²に向けた練習と位置付けた。本節では第 5 回 (11/9) のグループディスカッション①と、第 15 回 (2/1) のディベート式プレゼンテーションの活動について、学生の感想とともに報告する。

3-1 グループディスカッション① ディベート式プレゼンテーションの練習として

グループディスカッション①では、「ハロウィーンでの交通規制について考える」をテーマとした。この活動では「あるトピックについて複数の視点から考えて意見を述べること」を目的とした。具体的には異なる立場の人の意見を推察すること、つまり自分たちの意見や主張に反対する人々はどのように考えているかを検討し、それを踏まえたうえで再度自分の意見を述べる活動を行った。

前週の第 4 回 (10 月 26 日) で「ハロウィーンで交通規制、渋谷駅周辺を歩行者天国に」というニュース動画を視聴後、ハロウィーンに交通規制をすることの賛否を学生に尋ねたところ、全員が交通規制に賛成した。その理由として「ハロウィーンを楽しめる」「交通事故が防げる」「(規制区域は) 一部のみなので問題はない」等が挙げられた。しかしこれらの意見は単にニュースの内容をなぞっただけの「感想」であり、特に深く考えられたものではなかった。そこで、第 5 回までに「交通規制反対派はどのような理由を主張するか」を各自考えてくることを課題とした。

第 5 回のグループディスカッション①では、まず 4 人グループで、交通規制反対派の理由を話し合い、次に「反対派の人々に、交通規制をしたほうがよい (= 賛成) という意見をどのように説明するか」という課題を出した。授業の最後に各グループの話し合いの要点を黒板に書き出し、全体で共有した。ここで学生が挙げたのは前回と同じ「交通規制賛成」の意見ではあるが、その内容は下記のようになった。

- ・規制をしなくてもハロウィンに参加する人は止められないため、交通規制をしたほうがかえって事故を防ぐことができる。救急車等の手配もしておく。
- ・混乱のないように早めに運転者に (交通規制の情報を) 知らせれば影響は少ない。
- ・海外の人にとっては、東京旅行の特色になり、経済効果がある。
- ・日本の「(どの国の) 祝日も存分楽しんでいる」ところは日本人の民族性。
- ・1 年に 1 度だけの規制なので、他の祭りやイベントと同じく混乱しない (例: マラソン大会、だんじり祭り)。

グループディスカッション①の授業後のコメントシートには、ディスカッションを通じて様々な観点

² 時事日本語Ⅱの履修者にわかりやすいように、シラバス説明には「プレゼンテーション」という言葉を用いた。本稿では、授業の最終回に行った活動を「ディベート式プレゼンテーション」とし、練習や準備を含めた一連の活動を「ディベート活動」として区別する。

から検討すること、自分の意見を分かりやすく伝えることへの言及が見られた。学生のコメントの抜粋を表3に記す³。

表3 グループディスカッション① 活動後の学生のコメント

- ・ほとんどの学生がハロウィーンのときの交通規制について同じ意見だったが、その理由がそれぞれ違ったことが印象的でした。
- ・ほかの立場に立つと、ほかの角度から見ると、もっと多い結論が出せるかもしれません。自分一人で作るなら、考え方〔考え方〕はとても狭いでしょう。
- ・国ではこのような活動をしたことがなかったから、どうすればいいのかもしれないし、こんな活動に何の意味があるのか知りませんでした。しかし、試してから分かったことは同じ質問だけど、各自の考え方がこんなに違うことがあるんだということを知りました。
- ・自分の主張を他人にもっと効果的に伝える話し方について考える機会になりました。自分の意見をはっきり言うのも大事だが、相手の意見も良く聞いてお互いに合意点を見つけたり、問題を解決したりするのも大事だと考えました。
- ・本日の活動を通じて、あるテーマについて、説得力がより一層高くなるように、どうやって自分の意見を述べたらいいのかという知識も取得した。自分の意見を言うだけではなく、根拠として明確なデータを示すのが必要だ。

3-2 ディベート式プレゼンテーション

第15回のディベート式プレゼンテーションでは、以下の2つをテーマとした。

A： 「観光及び地域経済の振興のために、大阪市内にカジノを作るべきである」

B： 「成人式は、市などの自治体ではなく、家族や友人など個人的に祝うべきである」

この2つは、第11回・12回の授業で扱ったニュースのトピックに関連するものであり、その際にグループで各国の事情や個人の意見等を話し合っている。

まず、12名の学生をランダムに「A 賛成派」「A 反対派」「B 賛成派」「B 反対派」の4グループに分けた。そして第13回・第14回をグループでの準備期間とし、各グループで発表の資料を作成した。その際、(1)自分たちの主張だけではなく、相手側の主張も予測して論を展開すること、(2)主張を支える根拠となる資料を示して論理的に説明することの2点について注意するように指示した。

第15回のディベート式プレゼンテーションのスケジュールを表4に示す。各テーマ終了後には、聴衆としてプレゼンテーションを聞いていた学生が判定を行った。判定の際は自分の個人的な賛否の意見ではなく、「きちんと根拠が示されているか」「わかりやすく説明されているか」を基準とし、より論理的な発表をしたグループを決めるように注意した。そしてこの判定の結果は授業の成績には一切関係ないことも全員で確認した。

2つのディベート式プレゼンテーションの終了後、全員で活動を振り返り、改めて感想や意見を述べる時間を設けた。さらに無記名のアンケート調査を実施し、今回のディベート活動や授業全体についての意見を求めた。

³ 学生のコメントは意味が理解できるものであれば原文のまま載せている。筆者による訂正は括弧〔 〕に記す（以下同様）。

表 4 ディベート式プレゼンテーションの流れ

7 分	賛成派グループ 発表 (肯定側立論)
2 分	反対派グループ質問準備・反対派から賛成派への質問・賛成派の答え (否定側尋問)
7 分	反対派グループ 発表 (否定側立論)
2 分	賛成派グループ質問準備・賛成派から反対派への質問・反対派の答え (肯定側尋問)
2 分	再発表の準備時間
2 分	反対派グループ 再発表 (否定側反駁)
2 分	賛成派グループ 再発表 (肯定側反駁)
1 分	聴衆者による判定

3-3 ディベート式プレゼンテーションの感想 アンケートの回答より

ここでは、アンケート調査の回答をまとめて記述する。アンケート調査には、時事日本語Ⅱの授業で行った聴解の教科書を使った学習や、担当講師の教え方についての質問項目も含まれるが、ここではディベート式プレゼンテーションに関する回答のみ示すこととする。表 5-8 には 12 名の学生 (S1~S12) の記述回答を記載する。

(1) 発表準備の過程に関して

「発表の準備に積極的に参加したか」という質問（選択式）に対し、「非常にそう思う」（6 名）、「そう思う」（4 名）、「あまりそう思わない」（2 名）の回答があった。自由記述には、プレゼンテーション前の準備段階におけるグループでの話し合いに関する内容が多く見られた。自分達の意見の根拠となるデータを探す、各国の状況について情報交換するなどの活動を通して徐々に自分達の意見がまとまっていくこと、グループ内での交流が進んだことなどが挙げられた（表 5）。

表 5 発表準備の過程に関する記述

- ・グループ発言前、みんな一緒に討議とか、考えると、有益の過程と思う。自分が意見を述べるのはことばと思想の交流ができる。(S3)
- ・(自分の意見とは反対の発表をすることになって) 少し不安でした。しかしいろいろな資料を集め、グループで話し合うことによって不安がなくなり、自分にも説得できるような理由ができました。(S8)
- ・このテーマがむずかしい、こんきょがあまりないかなと思ったが、よく調べると、いろいろなことがわかって、自分の意見もどんどん変わった。(S10)
- ・この活動は一般の発表よりおもしろいが、一般の発表より難しかった。だが、資料の根拠を調べるのは重要なスキルと思う。大変だったが、いろいろなことを勉強できた。(S11)

(2) 活動から得た学びに関して

「発表から多くのことを学べたか」という質問（選択式）には「非常にそう思う」（7 名）、「そう思う」（4 名）「あまりそう思わない」（1 名）の回答があった。自由記述では、相手の話をよく聞くこと、伝わりやすい話し方を意識することの大切さに関するものが見られた（表 6）。

表 6 活動から得た学びに関する記述

- ・チャレンジしたと思う。討論は強い聴く能力がいるし、話す能力も大変重要である。この活動をとおしてよく鍛えた。(S7)
- ・今まで授業でやってきた新聞記事やニュースを通じて、もっと論理的な話し方、書き方についての勉強ができたことを確認する活動だったと思います。(S12)

しかしながら、この質問に「あまりそう思わない」と回答した学生 (S6) からは、「(自分のグループの意見は) どうしても否定できないから (主張する) 理由が本当に見つからない。全然無理だった」との意見が出された。ディベートのテーマや主張が自分の意見と全く合わないと、活動が学びにつながりにくいと感じる学生もいることもわかった。

(3) 時事問題を扱うことに関して

学生の自由記述からは、ニュースや新聞記事の内容をテーマとして取り上げることを肯定的に捉えている意見が多く挙げられた (表 7)。

表 7 時事問題を扱うことに関する記述

- ・留学生として、日本に住んでいて、日本の時事など知るべきだと思う。しかし、私は平日ニュースを見るとか全然しない。授業でしたら、よかったと思う。(S3)
- ・日本の社会、政治、経済、様々な方面からニュースを聞いて見ることは、この国の文化、情況よく理解できる。(S4)
- ・日本、つまり「先進国」の時事問題は、多分他の国でも見られる (少子化、老人介護とか) から、これらのニュースを通じて、自分の国の問題にも関心を持たせるのはいいと思う。(S6)
- ・ニュースをきょうみないが、この授業をとって、おもしろいニュースもあって、これからニュースにかんしんがある。(S10)
- ・いいと思います。ただ、あまり興味がないニュースや時事問題は集中しにくいと思います。(S2)

一方で S2 が述べているように、学生にとって興味がない問題は取り組みにくいと考えられる。ニュースから日本の社会問題を知るだけではなく、それを学生自身に関わる問題として関連させていくことも必要だったと思われる。また、授業で扱うニュースやディベートのテーマの決定にも学生が参加できるようにしていくことで、より主体的な参加に繋がると考えられる。

(4) 改善を要する点に関して

学生の自由記述からは、発表の時間が短すぎて言いたいことが言えなかったという意見が多く挙げられた (表 8)。今回のディベート式プレゼンテーションでは各テーマ 30 分、各グループの持ち時間は 11-12 分程度であり、途中で発表を切り上げなければならない学生もいた。時間内に収まるよう、発表内容を簡潔にまとめるスキルも重要であるため、今後はその練習時間も必要となるだろう。表 8 で S5 が指摘しているように、ディベート式プレゼンテーションを学期初めから複数回実施できれば、学生間の交流も促進され、発表のスキルの向上も目指せるのではないかと考えられる。

表 8 改善を要する点に関する記述

- ・もっと時間ほしいけど、いつもよりいいたいことは多かったから。(S1)
- ・たのしかったけど、もうちょっと発表の時間があつたらよかったと思います。(S2)
- ・反論のとき、もっとじかんがほしい。興味を持っている話題となると、話しがどんどん出てくる。そして時間に間に合わない、メンバーが補足できる。(S4)
- ・できれば期末ではなく、学期の初めでやったほうがいいのかもしれない。新たな留学〔留学生〕と仲を深めるチャンスにもなれるかと思います。(S5)

4. 今後の授業改善に向けて

本稿では、時事日本語Ⅱで実施したディベート活動の内容と、アンケート調査から得られた学生の感想について報告した。3-3 で述べたように、調査結果からはこの活動に関して学生が肯定的な評価をしていること、学びや気づきを得たことが示唆されたが、全員が満足するには至っていない。学生がより主体的に、深い学びを得るために今後の改善として、以下の二点が考えられる。

一点目は学生がより主体的に参加できるような授業設計をすることである。その一つとして、学生自身にニュースのトピックやディベートのテーマを選択させることも可能である。また、活動後に発表者と聴衆を交えた振り返りの時間を十分設けることで、より深い学びへと繋げられると考えられる。

二点目はこの活動の意義を学生に丁寧に説明することである。一部ではあるが、ディベート式プレゼンテーションを「論争」と感じている学生もいた。ディベートは相手側を論破したり、勝ち負けにこだわったりする対立的なものではなく、相手側の主張を踏まえたうえで、いかに論理的に、かつわかりやすく自分の主張を伝えるかを学ぶものである。学生の多くはディベート未経験のため、活動の本来の意義・意図を理解してもらえよう、繰り返し説明する必要があると思われる。

さらに今後は、この時事問題に関するディベート活動が学生の「深い学び」につながっているかどうかという検証も必要になるだろう。授業内でディベートがうまく成立しても、それはあくまでも「授業でのテーマ」に限定された活動である。留学生として日本の大学に来た彼らが、これまで持っていた知識や言語・文化的背景を活かしながら、社会の諸問題に対してどのように深くアプローチできるか、そのためには日本語の授業でどのような支援が可能なのか、今後の課題として検討していきたい。

参考文献

- 呉宣児・新井健一郎・謝志海・大沼久夫・張渭涛（2016）「ディベートを用いたアクティブラーニングの試み ―国際コース 1 年前期『基礎演習』での取組」『共愛学園前橋国際大学論集』 16:145-156.
- 高橋純子（2015）「〈報告〉ディベートの効果と可能性：『日本語学習 I』の実践報告」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』 30:299-307.
- 西谷まり（2001）「ディベート活動と通じた口頭表現の指導法」『一橋大学留学生センター紀要』 4:57-73.
- 服部裕（2003）「ディベートによる学生参加型授業の試み―『総合的学習』におけるディベートの可能性―」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』 25:133-143.
- 和井田節子・小泉晋一・田中卓也（2016）「教員養成課程におけるディベート学習の教育的効果：思考力と社会的能力に着目して」『共栄大学研究論集』 14: 193-216.

参考 URL（授業で視聴したインターネットニュースサイト）

TBS NEWS i <http://news.tbs.co.jp/>

朝日新聞 DIGITAL <http://www.asahi.com/>

NHK NEWS WEB <http://www3.nhk.or.jp/news/>

産経ニュース <http://www.sankei.com/>

神戸新聞 NEXT <https://www.kobe-np.co.jp/>

平成 28 年度 国際センター 活動報告

1. 日本語・日本事情教育

平成 28 年度に留学生のために開講した授業、及び受講者の内訳は下記の通りである。
カリキュラム改正により、平成 27 年度に学部生向けの日本語科目が「日本語Ⅰa」「日本語Ⅰb」「日本語Ⅱa」「日本語Ⅱb」の 4 科目となり、2 回生用の「日本語Ⅱa」「日本語Ⅱb」が今年度開講した。

学部留学生のための授業

学年	科目名	単位（期間）	曜日・時 限	担当教員
1回生	日本語Ⅰa・Ⅰb	2×2（前・後）	木・Ⅱ	長谷川ユリ
2回生	日本語Ⅰa・Ⅱb	2×2（前・後）	火・Ⅰ	村井卷子

教養基礎科目（※日本人学生とともに受講できる授業）

学年	科目名	単位（期間）	曜日・時 限	担当教員
1回生	日本事情	2（前）	水・Ⅱ	長谷川ユリ
	国際理解	2（後）	水・Ⅱ	中山あおい
	日本科学技術史概論	2（後）	木・Ⅳ	城地茂

日本語日本文化研修留学生、交換留学生のための授業

レベル	科目名	単位（期間）	曜日・時 限	担当教員
中上級	時事日本語Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	水・Ⅰ	古川敦子
	日本語上級漢字Ⅰ・Ⅱ		金・Ⅳ	城地茂
	中上級聴解Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	火・Ⅱ	村井卷子
	日本語中上級読解Ⅰ・Ⅱ		月・Ⅰ、月・Ⅱ	長谷川ユリ、間晶子
	日本の言語と文化Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	木・Ⅲ	古川敦子
		2×2（前・後）		
		2×2（前・後）		
中級	日本語中級文法Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）	木・Ⅲ	長谷川ユリ
	日本語中級会話Ⅰ・Ⅱ		月・Ⅱ、月・Ⅲ	間晶子
	日本語漢字Ⅰ・Ⅱ	2×2（前・後）		城地茂

		) 2×2 (前・後))	金・Ⅱ	
初中級	日本語初中級会話aⅠ・Ⅱ 日本語初中級会話bⅠ・Ⅱ	2×2 (前・後)) 2×2 (前・後))	月・Ⅲ、月・Ⅰ 木Ⅰ	長谷川ユリ 長谷川ユリ
初級	総合日本語a 総合日本語b 総合日本語c 総合日本語d 総合日本語e 総合日本語f	2 (前) 2 (前) 2 (前) 2 (後) 2 (後) 2 (後)	月・Ⅱ 火・Ⅲ 水・Ⅱ 月・Ⅱ 火・Ⅲ 水・Ⅱ	長谷川ユリ 古川敦子 古川敦子 長谷川ユリ 古川敦子 古川敦子
	日本の社会と文化Ⅰ・Ⅱ 日本文化史Ⅰ・Ⅱ 日本近現代史 教育と国際化 日本の教育と若者文化 大阪の文化Ⅰ、Ⅱ 日本の伝統文化Ⅰ、Ⅱ Arts and Sciences in Japan Japanese Culture and Education 文化交流実践研究 日本文化研究	2×2 (前・後)) 2×2 (前・後)) 2 (前) 2 (前) 2 (後) 2×2 (前・後)) 2×2 (前・後)) 2 (前) 2 (後) 2 (前・後)) 2 (前・後))	火・Ⅲ 金・Ⅲ 木・Ⅳ 月・Ⅲ 月・Ⅳ 火・Ⅳ 火・Ⅴ、金・Ⅰ 火・Ⅳ 火・Ⅳ 集中 集中	中山あおい 城地茂 城地茂 中山あおい 中山あおい 国際センター教員 中山あおい他 中山あおい他 中山あおい他 国際センター教員 指導教員

教員研修留学生のための授業（補講）

科目名	曜日・時限	担当教員
日本の教育	月・Ⅳ（前）	中山あおい

前期受講者数（実数）

後期受講者数（実数）

身分	人数
学部生	39
研究生	0
教研生	7

日研生	16
交換留学生・特別聴講生	36
計	98

前期受講者数出身別内訳
後期受講者数出身別内訳

出身	人数
中国	37
韓国	14
ベトナム	8
カンボジア	6
タイ	5
台湾	4
その他アジア	6
ヨーロッパ・アメリカ	15
中南米	3
計	98

身分	人数
学部生	38
研究生	1
教研生	7
日研生	6
交換留学生	31
計	79
出身	人数
中国	40
韓国	9
ベトナム	7
台湾	6
タイ	4
その他アジア	4
ヨーロッパ	6
オセアニア	1
中南米	2
計	79

日研生、交換留学生用の授業の中からフィールドワークや体験を取入れたものを紹介する。

(1)「大阪の文化」

本学が大阪にあるという特色を生かし、大阪やその周辺の文化や歴史について、フィールドワークを通して学んでいくオムニバス形式の授業である。見学先は、「大阪の文化Ⅰ」（前期開講）では、造幣局（桜の通り抜け）、大阪城、インスタントラーメン発明記念館、建国小学校、大阪歴史博物館、「大阪の文化Ⅱ」（後期開講）では、大阪くらしの今昔館、造幣博物館、仁徳天皇陵古墳などであった。フィールドワークをより効果的に行うために、それぞれの見学の前にセンター教員及び学内の教員による講義を行った。また、「大阪の文化Ⅱ」では、「大阪と能」のテーマで、観世流能楽師の山中雅志氏による講演も行った。



(2)「日本の伝統文化」

「日本の伝統文化Ⅰ」は、国際センターと保健体育、美術教育、音楽教育の教員によるオムニバス授業であり、留学生は三味線、剣道、陶芸などを体験する。また、「日本の伝統文化Ⅱ」は、芸術講座の協力のもと、書道を基礎から学ぶ授業である。漢字やかなの書き方から始め、年賀状や色紙の作品も書き上げた。一回だけの体験でなく、継続的に学ぶことが特徴である。



(3)「文化交流実践研究」

留学生が大学や地域の人々と交流することで日本や日本人の考え方、日本の文化に対する理解を深めるだけでなく、日本の学生や地域住民の異文化理解を促進することを目的に平成 26 年度に新設された授業である。前期は、「国際交流週間」期間中の生協学生委員会との協働によるパフォーマンスや料理の紹介、大阪府立柏原東高等学校での交流を行い、後期は、地域のボランティアグループとの交流の一環としての自国文化の紹介、附属高校平野校舎での授業見学および自国の子どもの遊びの紹介などを行った。



2. 修了レポート発表会

平成 28 年度の「修了レポート発表会」は、前期は修了者の人数が 48 名と多かったため、8 月 4 日、5 日の 2 日に分けて行われ、後期は 2 月 3 日に開催された。日本語日本文化研修留学生、交換留学生、教員研修留学生が勉学、研究の成果を発表した。今年度前期には、韓国忠南大学の「1 セメスタープログラム」の参加学生（忠南プログラム生）も修了発表に加わった。指導教員をはじめ、国際センター教員、日本人学生から活発な意見や質問が出された。また、優れた発表を行った学生を選び、前期、後期の修了式において表彰した。

前期	2016/8/4 9:00～15:45 2016/8/5 9:00～16:15	交換留学生	26	48
		日研生	16	
		特別聴講生（忠南プログラム）	5	
		研究留学生	1	
後期	2017/2/3 10:45～15:00	交換留学生	7	13
		教研生	6	

3. 交換留学（受入と派遣）※特別聴講生を含む

受入	韓国	10	35 名
	中国	7	
	台湾	7	
	タイ	3	
	ベトナム	3	
	フランス	2	
	ドイツ	1	
	アメリカ	1	
	オーストラリア	1	
派遣	アメリカ	4	14 名
	ドイツ	3	
	韓国	3	
	台湾	2	
	フランス	1	
	スウェーデン	1	

本学が学生交流協定を締結している海外の大学は平成 28 年 4 月現在で 13 カ国・地域の 30 機関であり、そのうち、過去 5 年間に受入実績があるのは 9 カ国・地域 24 機関である。受入では実績がない国はスウェーデン、フィンランド、カナダ、キルギスであり、カナダは派遣のみの特別な学生交流協定を結んでおり、27 年度に協定を結んだばかりのキルギスからは 29 年度に受け入れる予定であることから、スウェーデンとフィンランド以外の国からの受入れは全般的に活発に行われていると言える。

これに対して、過去 5 年間に派遣実績があるのは 9 カ国・地域 14 機関にとどまっている。欧米やオセアニアの国々への留学を希望する学生は毎年必ずいるが、アジア、特に中国、ベトナムへの留学希望者は極めて少ない。しかし、派遣学生の人数としては、27 年度の 9 名から 14 名に増えている。派遣学生を増やすために、国際センターでは、オフィスアワーで留学相談を行うとともに、以下の説明会等を実施した。

4 月 20 日 海外研修説明会・成果発表会

4 月 25 日 交換留学・語学研修説明会（天王寺キャンパス）

4 月 27 日 交換留学説明会・経験者発表会

4 月 27 日 トビタテ！留学 JAPAN 説明会

10 月 12 日 海外研修説明会・成果発表会

10 月 19 日 交換留学説明会・経験者発表会

今年度は、日本学生支援機構（JASSO）の海外留学支援制度（協定派遣・協定受入）に「グローバルな視野をもつ教員を育成するための教育観察実習プログラム」「大阪教育大学留学生大阪・関西魅力発見プロジェクト」が採択され、受入学生 27 人、派遣学生 8 人に奨学金が授与された。また、派遣学生 3 人に業務スーパージャパンドリーム財団奨学金、1 人に馬場財団国際理解教育人材養成奨学金が支給された。

4. 日研生、教研生、研究留学生の受入

日本語日本文化研修留学生（日研生）の受入れ人数は 6 名であり、昨年度の 16 人からは大幅に減少した。これは日研生全体の受入れ人数が昨年比べて減ったためである。6 名のうち、大使館推薦は 4 名、大学推薦は 2 名である。

教員研修生は、昨年 10 月から大阪教育大学で研究活動を始めた 2 名に加え、4 月からは大阪大学で予備教育を修了した 5 人（うち 1 人は 6 月末で帰国）、そして 10 月からは 1 人を受け入れている。

日本語日本文化 研修留学生	カンボジア	1	6 名
	インド	1	
	ベトナム	1	
	ポーランド	2	
	中国	1	
教員研修留学生	韓国	1	8 名
	タイ	1	
	中国	1	
	バングラデシュ	1	
	ペルー	1	
	ブラジル	1	
	スペイン※6 月末まで	1	
	ロシア ※10 月より	1	

5. 語学研修・文化研修

大阪教育大学で実施している語学研修・文化研修は、一部のプログラムを除き単位化され、出発前の事前講義の受講、帰国後の発表を含む全ての条件が満たされた場合、教養基礎科目の「海外文化研究」の 2 単位が与えられている。また、平成 28 年度は、アメリカ、ドイツ、フランスのプログラムが日本学生支援機構（JASSO）の海外留学支援制度（協定派遣 短期研修・研究型）に採択され、一部の参加者に奨学金が付与された。

国・地域	研修期間	研修先	人数	計
ドイツ	2016/7/31-8/29	トリア大学	7	28
アメリカ	2016/8/15-9/23	University of North Carolina Wilmington	3	
タイ	2016/8/15-8/24	チェンマイラジャパット大学	2	

フランス	2016/9/3-10/2	リヨンカトリック大学	2	
韓国	2016/9/5-9/13	ソウル教育大学	2	
シンガポール	2017/2/5-2/12	南洋理工大學	2	
オーストラリア	2017/2/9-3/12	Griffith University	3	
台湾	2017/3/7-3/16	国立台北教育大学	7	

(1) アメリカ観察実習・語学研修

本年度も研修先は本学と協定を結ぶアメリカ合衆国ノースカロライナ大学ウィルミントン校（UNCW）で、5週間の英語研修の後、近隣の小学校において2日間の観察実習を行った。また、参加者は1ヶ月以上をアメリカのホームステイ先で過ごすことにより、アメリカの生活スタイルや文化を体験することで、アメリカへの理解を深めた。

現地の学校での観察実習では、日米の教育について様々な観点から比較するとともに、日本の踊りや遊びなどの文化紹介を行い、小学生との交流を図った。また帰国後は、報告会において、それぞれが研修の成果を発表した。

なお、本研修は日本学生支援機構（JASSO）の海外留学支援制度（協定派遣 短期研修・研究型）「国際的な視野をもつ教員を育成するためのアメリカ教育観察実習プログラム」に採択され、参加学生にJASSO奨学金が付与された。



(2) ドイツ・フランス文化研修

本研修は、日本学生支援機構（JASSO）海外留学支援制度（協定派遣）の「ドイツ・フランス文化研修－芸術家と出会うフィールドワーク」に採択され、ドイツ派遣は5名、フランス派遣は1名、奨学金（8万円）を給付された。

学生たちはドイツ（トリア大学）とフランス（リヨンカトリック大学）の2つの協定校で実施されている語学研修に参加して、ドイツあるいはフランス出身の芸術家をひとり選り、独自のフィールドワークを含む調査を行った。

学生らは集中講義「海外文化研究」を履修し、1. 芸術家のプロフィールと時代背景の調査 2. フィールドワークの準備 3. 語学研修 4. フィールドワークの実施 5. 帰国後の成果発表 という手順で研修を行った。ただ、今年度はフランス、ドイツでテロ

や無差別殺人が相次いだために、学生の単独行動は控えさせ、フィールドワークにも引率教員が同行した。

参加学生はこのプログラムへの参加を通じて、語学力の向上にとどまらない、海外での調査研究を単独で行うという体験をし、「調査ツールとしての外国語」を実践することができた。

(3) オーストラリア語学研修

28 年度もブリスベンのグリフィス大学附属語学学校で実施した。今年度は、研修先のプログラム開始時期とプログラムの内容は、約 4 週間半の語学研修の間、ホームステイをしながらオーストラリアの文化を体験することである。ホストファミリーとのコミュニケーションは、始めはうまく行かないこともあるが、次第に慣れてホームステイ先の家族との交流を深めていく様子が見られる。英語の授業は自分のレベルに合ったクラスに入ることができ、世界各国の学生とともに学ぶことができる。大学が提供するコアラ保護区へのフィールドトリップ等にも参加し、最終週にはグリフィス大学の日本語学科の学生との交流会が組まれている。帰国後の 4 月に発表を行い、次年度に単位が与えられる。



6. 海外教育研修の受入・協力

平成 28 年度に実施したプログラムは以下の通りで、タイ、ドイツ、韓国のプログラムが日本学生支援機構（JASSO）の留学生交流支援制度（協定受入 短期研修・研究型）に採択され（タイのプログラムはコンソーシアムの基幹校である京都教育大学が申請）、参加者には奨学金が付与された。

派遣元大学（国）	プログラム名	受入れ期間	参加者数（引率教員）
----------	--------	-------	------------

UNCW（アメリカ）	海外教育研修プログラム	2016/6/20 ～2016/6/23	11 名（3 名）
ラジャパット大学（タイ）	短期プログラム	2016/7/14 ～2016/7/15	8 名（1 名）
エアランゲン・ニュルンベルク大学（ドイツ）	日独比較教育体験プログラム	2016/9/1 ～2016/9/15	6 名
ハノイ大学（ベトナム）	ハノイ大学日本研修	2016/11/11	8 名（1 名）
ソウル教育大学（韓国）	海外小学校インターンシッププログラム	2017/1/23 ～2017/2/9	8 名

(1) UNCW海外教育研修プログラム

本学と協定を結ぶアメリカ合衆国ノースカロライナ大学ウィルミントン校（UNCW）の学生 11 人及び引率教員 3 人が、6 月 20 日（月）から 6 月 23 日（木）まで本学附属学校園をはじめ、大阪および奈良の公立小学校、中学校、高校で学校観察研修を行った。これは同大学教育学部の海外教育研修プログラムの一環で、本学はその実施に際して全面的に支援している。1 日だけの学校見学ではなく、4 日間にわたって研修先の学校に通うのが大きな特色である。本学のアメリカ語学研修・学校観察プログラムも UNCW の協力のもとで実施されており、双方向の交流が 10 年以上にわたり続けられている。アメリカ語学研修参加者や交換留学を予定している学生などが研修をサポートした。

1 日目は本学附属幼稚園、小学校、中学校、高校を見学、2 日目から 4 日目は、2 つのグループに分かれてそれぞれ主に小学校・中学校、高校を訪問し、様々な授業を観察したほか、習字の体験やクラブ活動の見学、児童生徒との交流等を精力的にこなした。参加者の中には現職教員の大学院生も 4 名おり、そのうちの 1 名は高校の校長であった。日米間の教育現場の違いについて研修先の教員と話し合う機会もあり、活発な意見交換が行われた。大阪教育大学を訪問したグループは、教員養成課程のプログラム内容や学生サービスについて関係者にインタビューを行い、本学の学生との交流も楽しんだ。

研修を終えた参加者からは「日本の学校文化は素晴らしい」「子どもたちにのびのびと学ばせている」「日本で学んだことを是非アメリカで応用したい」などの感想が寄せられた。

日程	訪問先	参加者数（引率教員）
6 月 20 日（月）	大阪教育大学附属平野幼稚園、小・中・高	11 名（3 名）
6 月 21 日（火）	奈良県三郷町立三郷北小学校	6 名（2 名）
	大阪府立八尾高等学校	5 名（1 名）
6 月 22 日（水）	柏原市立国分小学校、柏原市立国分中学校	8 名（2 名）
	大阪教育大学柏原キャンパス	3 名（1 名）
6 月 23 日（木）	奈良県三郷町立三郷北小学校	6 名（2 名）
	大阪府立八尾高等学校	5 名（1 名）



(2) 日独比較教育体験プログラム

協定校のトリア大学（ドイツ連邦共和国）から学生 6 人を受入れ、9 月 1 日（木）～9 月 15 日（木）の日程で「日独教育比較体験プログラム」を実施した。

このプログラムは、ドイツの大学の日本語学習者を対象に、日本の教育と文化について、小学校での観察実習や研究授業と文化施設（博物館や能楽堂等）の訪問を通じて、理解を深めてもらうことを目的としている。日本学生支援機構（JASSO）の留学生交流支援制度（協定受入 短期研修・研究型）にも採択され、研修参加者に奨学金（8 万円）が支給されている。

参加学生 6 名は講義「能楽」「日本の童話」そして「浮世絵」等を受講し、エクスカーションとして海遊館、山本能楽堂および上方浮世絵館の見学を行った。

9 月 9 日（金）には富田林市立東条小学校を訪れ、授業を観察し、4、5、6 年生のクラスで研究授業「ドイツの紹介」をすべて日本語で行った。授業ではドイツの小学校、建物・町並み、食べ物等を紹介することに加えて、『赤ずきん』（日本語訳）を朗読して子どもたちを喜ばせた。

参加学生はおおよそ 2 週間のプログラムを終え、「毎日レポートを書いて日本語の力がついたし、日本の学校や伝統文化についてよくわかった。これからもっと日本語を学んで、次回は交換留学プログラムに参加したい」とコメントした。

同プログラムはすべて日本語で実施され、本学の日本人学生や留学生もチューターとして研修をサポートした。



(3) 韓国協定校からの海外小学校インターンシッププログラム（大阪）

本学の協定校のソウル教育大学（韓国）の学生が「海外小学校インターンシッププログラム」に参加した。日本学生支援機構（JASSO）の留学生交流支援制度（短期受入 短期研修・研究型）に採択されたもので、8人の学生に奨学金が授与された。

研修は、日本の小学校で教育実習（9日間）を行うため、多くは日本語で進められた。はじめに1週間、柏原キャンパスで、日本語の授業、日本文化、異文化理解、日韓関係論や教育実習に関する講義を16時限受講し、日本の小学校について理解を深めた後、東大阪市立長瀬北小学校、同・弥刀小学校で教育実習を行った。

研究授業では、韓国文化紹介を日本語で行った。児童に対する発問の仕方や授業時間の管理など、学習指導案を準備して臨み、良好な評価を得ることができた。

また、週末を利用して上方浮世絵館や関西各地（京都、奈良など）を訪れ、日本の伝統文化にも親しんだ。日本の神道に対する認識も新たになった。

研修中は、韓国に関心をもつ本学の学生たちがチューターとして常にサポートし、国際交流、異文化理解の実をあげることができた。これは、2月9日に行われた、成果発表会でも実習生も強調しており、非常に有意義なものとなった。また、この成果発表会には、東大阪市立弥刀小学校校長・原和久先生も出席され、教育実習を多角的にふりかえることができた。

7. 国際会議等

第7回国際センターシンポジウムを主催

第7回国際センターシンポジウム「海外教育実習の現状と展望」が7月20日（水）に柏原キャンパスで国際センターと教員養成課程の共催により開催され、学生、留学生、教職員ら約80人が参加した。

はじめに、台湾・高雄師範大学教授兼附属高校校長鄭卜五教授が、台湾の教育実習を歴史的に概説し、本学と同大学が協力して同校付設小学部で実施している海外教育実習を紹介した。韓国・ソウル教育大学美術専攻学生のキム・ユリ氏からは、日本とオーストラリアでの教育実習の経験が語られ、教員サイドだけではなく、実習生からの視点での報告がなされた。韓国・忠南大学の崔英淑教授は、同大学で実施している中国での海外教育実

習について紹介し、「実習を行う延辺地区は韓国語が話せる朝鮮族が多く住んでいるため、語学的な障害がないので、違う制度下での教育について理解が進んだ」との特殊事情が語られた。続いて教養学科芸術専攻書道コース学生の岡西望実氏が、本学協定校である台湾・台北教育大学での教育実習について発表し、日本と台湾の書道教育の差異を説明した。岡西氏は、学部生ではあるが、海外教育実習のわずかの時間に、詳細な考察をしたことが発表から読み取れ、本学の教育実習の充実ぶりを示す発表となった。最後に、学校教育講座・水野治久教授が高雄師範大学での海外教育実習について報告し、「生徒・児童との語学を用いたコミュニケーションは重要だが、それにもまして言語を用いないコミュニケーションが重要であり、その経験は教員になってから有形無形の財産になる」と参加者に語りかけた。

第二部では、国語教育講座・井上博文教授が司会を務め、講演者およびパネリスト全員によるパネルディスカッションを行い、日・台・韓の海外教育実習への取組み状況や課題について活発な議論が行われた。また、共通の課題として学生の経済的負担があり、パネリストからは奨学金の獲得や大学からの援助等各国の取組みが紹介された。

シンポジウムのコーディネーターを務めた国際センター・城地茂教授は、「発表の中で、日本国内での教育実習と海外での教育実習の比較が特に印象に残りました。国内、国外での教育実習を連携させて行うことが、これからの本学の国際化の大きなポイントになると感じました。」と総括した。

8. 協定校との交流

(1) ライプチヒ大学（ドイツ連邦共和国）と Erasmus+プログラム実施

エラスムス・プラス・プログラム Erasmus+ Program は、欧州連合（EU）が 2014 年から 2020 年まで提供する教育支援プログラムである。本学は学術交流校であるライプチヒ大学教育学部（ドイツ） Universität Leipzig, Erziehungswissenschaftliche Fakultät, BRD との間で、2016 年に奨学金を得て、スタッフ（教員派遣・受入各 1 名）および学生の交流（派遣・受入各 1 名）を実施した。

1. 教員派遣（大阪教育大学から教授 1 名）：2016 年 10 月 14 日から 10 月 27 日の 14 日間
2. 教員受入（ライプチヒ大学教育学部から教授 1 名）：2016 年 11 月 19 日から 12 月 3 日の 14 日間
3. 学生派遣（大阪教育大学から修士課程院生 1 名）：2016 年 9 月から 2017 年 2 月の 6 か月間
4. 学生受入（ライプチヒ大学教育学部から博士課程院生 1 名）：2016 年 9 月から 2016 年 12 月の 3 か月間

(2) 協定校からの訪問者

大学（国）	来訪者	訪問日
ハノイ大学（ベトナム）	ルアン学長他 2 名	4 月 8 日
東北師範大学（中国）	劉丹国際交流処科長（学生海外派遣）	6 月 3 日
グリフィス大学 （オーストラリア）	Sharon Bignell, Regional Manager for Japan and Korea Irene Austwick, Client Administration Officer	6 月 9 日
ビシケク人文大学（キルギス）	氏原名美東洋国際関係学部日本語学科長	10 月 18 日
ハノイ大学（ベトナム）	フオン日越コラボレーションセンター長	12 月 6 日

9. 広報活動等

国際センターは、国内各地の進学説明会に積極的に参加し、本学の魅力をアピールしてきた。その成果の一つとして、全国の日本語学校教職員からの推薦により、留学生に勧めたい進学先を選ぶ「日本留学アワーズ」に、本学は「西日本・国公立部門」で 27 年度、28 年度と 2 年連続で上位校に入賞した。評価された点は、学習・生活サポート、入試システム、教育内容等である。

今年度の海外での広報活動としては、NAFSA、台湾、韓国、ベトナムの日本留学フェアに参加した。

台湾で同窓会を開催

本学を卒業・修了した外国人留学生を対象にした海外同窓会が、7 月 16 日（土）に台湾の台北市で開かれ、卒業生や元交換留学生など 17 人が参加した。この同窓会は外国人留学生の卒業生・修了生の相互交流を促進するとともに、本学と国際社会とを結ぶ人的ネットワークを築くことを目的として実施するもので、台湾での開催は初めてである。

修了生を代表して劉得助氏（大学院美術教育専攻修了）による式辞、参加者の自己紹介などがあり、なごやかな雰囲気の中に会は進められた。修了生は、大学の日本語学科教員、小学校や高校の教員、出版社や貿易会社、翻訳・通訳など、日本での留学経験を活かした仕事についている人が多く、情報交換や先輩からアドバイスを受ける様子が見受けられた。

本学協定校である国立台北教育大学で教授を務める劉得助氏は、「2008 年の協定締結以来、両校の学生交流が着実に成果を上げていて、今日も数多くの修了生が集まり嬉しく思う」と語り、2015 年に本学の協定校となった国立屏東大学の傅玉香准教授は、「母校である大阪教育大学と協定を結ぶことになり、不思議な縁を感じる。今後の両大学の交流に期待している」と話した。

参加者からは「学生時代に戻ったようで本当に楽しかった」「また是非企画してほしい」との声が

寄せられた。



10. 地域連携

(1) 公開講座

平成 28 年度も公開講座「多文化共生と日本語教育－外国語として日本語を学ぼう－」を開講した。この講座は地域の日本語学習支援に関わっている方たちを対象としたもので、定員 30 名を超える申し込みがあった。日本語はどのような特徴を持つ言語か、日本語を母語としない人たちはどのように日本語を学ぶのか、どのようなことが難しいのか、国語教育と日本語教育はどのように違うのか、海外における日本語教育事情など、5 回シリーズで講義した。参加者からは、「日常生活で当たり前に使っている日本語についてよく分かった」「多方面から学べたが、外国人に教えるためにはどうしたらいいかもっと学びたい」等の感想が寄せられた。来年度以降も継続する予定である。

日時	講義の内容	担当者
10/8	日本語教育事情：多様化する日本語学習者	長谷川ユリ（国際センター）
10/15	日本語について学ぼう：日本語を外国語として見る	有田節子（立命館大学）
10/22	コミュニケーション能力向上のための教室活動	長谷川ユリ（国際センター）
11/29	国際理解と日本語教育	中山あおい（国際センター）
11/12	国語教育と日本語教育	井上博文（国語教育講座）
10/15	海外の日本語教育事情：台湾編	城地茂（国際センター）
10/22	韓国人日本語学習者が教えてくれること：対照言語学の視点から	若生正和（同志社大学）

(2) シニア CITY カレッジの講演

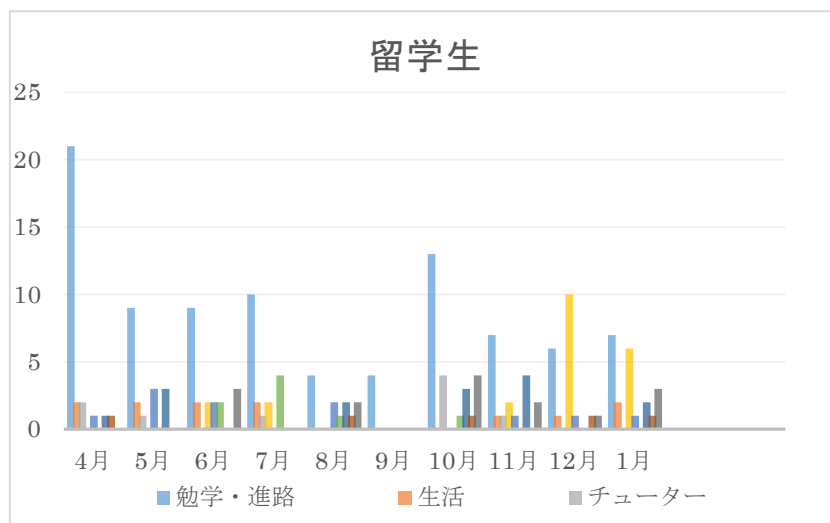
大阪府から認可を受けているシニア CITY カレッジの委託を受け、国際文化について 7 月 1 日（水）に講座を実施した。題名は「太陰太陽暦と七夕」で、50 名を超すシニア CITY カレッジ講座生が、国際センター・城地茂教授の講義を受講した。中国から伝わった暦法が、日本でいかに応用、変貌し新たな日本文化を創造したことを学んだ。

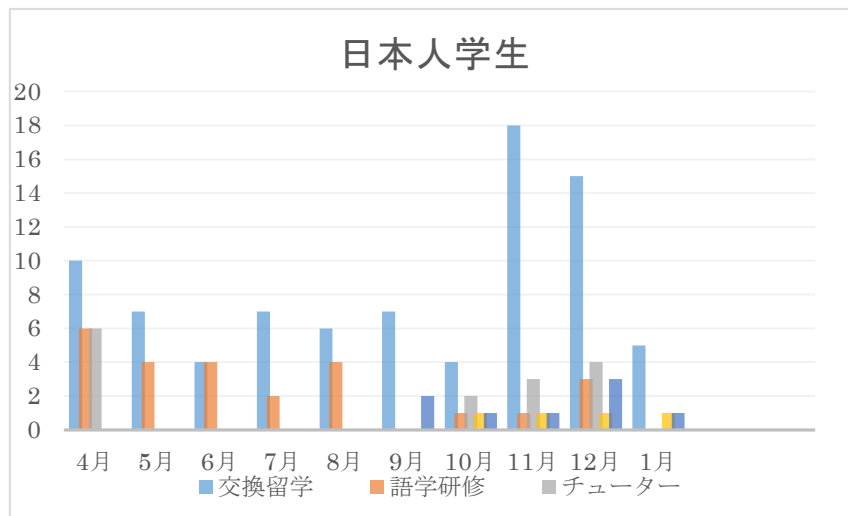
12 月 14 日（水）には、第 2 回目として、「中国ソロバンから日本ソロバンへの変化」の講座が実施された。梁上 2 珠梁下 5 珠の中国ソロバンが、梁上 1 珠梁下 5 珠の旧日本ソロバンを経て梁、上 1 珠梁下 4 珠の新日本ソロバンへと変遷した過程を文化的に平易に解説した。また、四則演算だけと思われがちなソロバンでも開平方はもちろん、三次方程式を解くことができるなどの新たな知見を得て、国連・ユネスコ無形文化遺産に登録された海外文化としての中国ソロバンを見直すこととなった。こうした文化の相互理解が草の根的国際交流につながれば幸いである。

(3) 柏原市内の小学校で国際理解の授業を実施

本学の教員志望の大学院生・学部生が留学生と協働で柏原市立堅下小学校で国際理解の授業を行った。これは、28 年度学生プロデュースとして採択された企画、「小学生の体験的な国際交流と国際理解の授業」を、堅下市立小学校の全面的な協力のもとで実施したものであり、日本人学生と留学生と一緒に授業づくりをすること、定期的かつ継続的に授業を行うことが特徴である。国際センターは、国際理解の授業で紹介する国を決定し留学生に依頼する時など、必要に応じて支援を行った。6 年生を対象とした授業を計 6 回実施し、タイ、インド、インドネシア、ブラジル、ペルー、韓国、中国、ベトナム、バングラデシュの学生 12 名が参加した。食事、言葉、音楽、遊び、小学校、休みの過ごし方、お正月など、幅広いテーマを取り上げたことで、児童たちが異文化を学ぶ貴重な機会を提供した。

1 1. 相談記録（平成 28 年 4 月～平成 29 年 2 月）





平成 28 年度 国際センター行事

新入生オリエンテーション・歓迎会

平成 28 年 4 月 1 日（金）・4 日（月）・6 日（金）

平成 28 年 9 月 27 日（火）・29 日（木）

平成 28 年度前期（4 月）、後期（10 月）の入学者に対するオリエンテーションを開催しました。これは新入生に対して留学生活や大学生活全般にわたって案内を行うもので、今年の新入生は右表のとおり 88 名でした。

高橋国際センター長の歓迎あいさつにはじまり、日本語の授業や図書館の利用方法、資格外活動、国民健康保険、奨学金に関する事等について説明を行いました。

夕方からは、指導教員や先輩留学生、日本人学生を交えた歓迎会が開催され、新入生の自己紹介、教員・先輩等の紹介を行いました。和やかな雰囲気の中、新入生の緊張もいくぶんかほぐれた様子でした。

区分	前期	後期
学 部 生	21	—
大学院生	12	—
教 研 生	8	1
日 研 生	—	6
研究留学生	—	0
特別聴講学生	8	22
研 究 生	5	0
忠南大学受入 プログラム	5	—
計	59	29

春季日本文化研修—岐阜方面—

平成 28 年 6 月 11 日（土）・12 日（日）

6 月に春季日本文化研修が実施され、留学生 71 名が参加しました。今回の研修先は、岐阜県の郡上八幡、高山、そして合掌造りで知られる世界遺産の白川郷です。

研修初日はまず郡上八幡で、城下町散策とともに「サンプル工房」にて食品サンプル作り体験をしました。食品サンプルは今では日本文化の一つとして海外でも人気を集めています。今回は天ぷらとレタスのサンプルに挑戦です。お湯の中にろうを流し、手で形を整えるその顔は真剣そのものでした。その後、飛騨に移動し、修徒館にて宿泊。夜はバーベキューで大いに盛り上がりました。

2 日目は高山からのスタートです。歴史の趣を感じる高山陣屋の見学、町屋が並ぶ上三之町散策など、そぞろ歩きを楽しみました。そして、いよいよ白川郷へ。展望台からの景観は素晴らしく、留学生は何枚も写真に収めていました。合掌造りの民家の一つ、和田家を見学した学生は、当主の方から家の構造や歴史を聞くこともできました。清らかな水の流れ、季節の植物、そして静かな山々に囲まれて立ち並ぶ民家という伝統的な日本の風景は、皆の心に強く残ったようです。

天候にも恵まれ、多くの留学生仲間と交流しながら、キャンパスの中には知らないことのできない日本の文化、歴史、生活を体験した 2 日間となりました。



「国際交流週間」を柏原キャンパスで実施

平成 28 年 6 月 13 日（月）～17 日（金）

今年も国際センターと大阪教育大学生生活協同組合との共催による「国際交流週間」を、6 月に実施しました。

第 2 食堂では留学生の出身地の料理をアレンジして販売しました。バイキングメニューとして、韓国の「プルコギ」、中華料理の「豉油皇香蔥爆鶏」と「生姜ミルクプリン」、インドネシアのサラダ「ガドガド」が日替わりで提供されました。6 月 15 日（水）には、生協前のサンクンガーデンにおいて料理のテント販売を行い、インドのハンバーグのような「ワダーパウ」、ドイツのジャガイモサラダ「カトフェルザラート」、中国の「宮保鶏丁」、カンボジアのパンプキンココナッツミルクデザート」を留学生と生協学生委員が販売し、短時間のうちに完売しました。本場の味に近づけるため、留学生と生活協同組合の間で相談と試食を重ねました。また、留学生と生協学生委員がアイデアを出し合ってポスターを作成し、いっしょにテントを設営するなど、準備の段階から共同作業を通して交流を深めました。

料理のテント販売の横では、留学生によるパフォーマンスが披露されました。民族衣装に身を包んだ留学生が登場するとサンクンガーデンの会場は一気に華やかさを増し、通り

すがりの人も民族音楽に足を止め、多くの人でにぎわいました。留学生と浴衣を着た生協学生員の2人が司会を務め、ベトナムの琴の演奏と歌、タイの様々な地方のダンス、カンボジアの男女6人の民族舞踏、インドの民族舞踏と続き、最後はタイの大学院生が留学生や日本人学生に呼びかけ、いっしょにポップミュージックにあわせて踊り、会場を沸かせました。

サンクンガーデンには、グローバル香芝の方々や地域の住民、大学見学に訪れていた高校生の姿もあり、大学発信の国際交流の場となっていました。



留学生のための七夕飾り体験を実施

平成 28 年 7 月 6 日（水）

7 月 6 日（水）、シニア自然大学校の皆さまの主催により、今年度も七夕の笹飾り体験を開催していただきました。

日曜日に刈り取った笹を用意して頂き、緑の香りの中で、笹飾りを行いました。

色とりどりの笹飾りに加え、それぞれの想いをのせた短冊で笹を彩りながら、シニア自然大学校様と交流を深めました。願い事は「日本語能力検定合格」や七夕らしく恋人、あるい

は、故国の家族の「家内安全」を短冊に記入していました。日本語能力検定に出たのか、「気力旺盛」といった四文字熟語も見られました。

丁寧なご指導を受けながら、隣の友人達と賑やかに笹飾りを作り、日本の文化を満喫した一日でした。今回も、八尾市にホームステイに来た学生など3名も参加し、地域の国際交流にも貢献できました。

終了後は、恒例の記念撮影の後、猛暑日の大阪教育大学を後にしました。



柏原市民に講演 ―異文化の暮らしを学習しよう―

平成 28 年 7 月 6 日（水）

7月6日（水）、柏原市フローラルセンターで毎年実施されている講座「異文化の暮らしを学習しよう」において、本学の留学生プナム・アショク・サガデさんが講師として招かれ、出身国のインドについて紹介しました。プナムさんは日本語・日本文化研修留学生として本学で1年間勉強しています。

プナムさんは、インドの首都、国獣や国鳥などの基礎的な情報について簡単に触れた上で、主に自身の出身地であるマハラシュトラ州の食べ物、お祭り、服装について詳しく話しました。国土の広いインドの中西部に位置するマハラシュトラ州は、日本とほぼ同じ面積です。山側と海側では農産物や食べ物が異なること、毎日食べるカレーは材料や種類が豊富なこと、数多くのスパイスを使うことなど、分かりやすく解説しました。また、ガネーシャ・チャトルティーなど有名な祭りについてもスライドを使いながら紹介しました。

一番盛り上がったのは民族衣装の話です。自らも美しいサリーに身を包んだプナムさんがインド各地の服装の違い、男性や子どもの衣服などについて一通り述べたあと、フロアからお一人が前に出て、サリーの試着にチャレンジしました。プナムさんが4.5メートルもある長い布を手際よく巻いていくと、会場からは感嘆の声があがりました。参加者からは、「サリーの色がきれいでとてもすばらしい」「実際に着るところが見られて楽しかった」などの

感想が寄せられました。



留学フェアに参加

台湾 平成 28 年 7 月 17 日（日）

韓国 平成 28 年 9 月 11 日（日）

ベトナム 平成 28 年 10 月 15 日（土）

7 月～10 月にかけて、日本学生支援機構主催による「日本留学フェア」に参加しました。「日本留学フェア」は日本への留学を希望する高校生・大学生等を対象として世界各国主要都市で毎年開催されており、日本留学を希望する多くの学生に大阪教育大学を PR しました。本学で勉強したことがある元留学生も応援にかけつけ、「寮はありますか」「奨学金はありますか」「日本留学試験の点数はどのくらい必要ですか」等、熱心に質問する学生に先輩としてアドバイスをしていました。

《本学ブース訪問者数》

台湾（台北）	7 月 17 日開催 … 50 名
韓国（ソウル）	9 月 11 日開催 … 73 名
ベトナム（ハノイ）	10 月 15 日開催 … 42 名

3 カ国 3 会場を通して計 120 名のフェア参加者が本学ブースを訪れ、熱心な眼差しで担当教員の説明に耳を傾けていました。



オープンキャンパスを開催

平成 28 年 7 月 30 日（土）・31 日（日）

今年も開催された「オープンキャンパス」で留学生向けの説明会と日本人学生向けの留学相談会を開催しました。近畿圏の日本語学校等から留学生 13 人、留学等に関心のある日本人受験者 52 人の参加がありました。本学へ進学を希望する留学生には、在籍留学生がチューターとなって、説明会の通訳補助や大学施設の案内を行い、進学相談にも応えていました。また海外の協定校へ交換留学経験のある日本人学生が、留学を志す高校生から質問をうけ、自らの留学体験談語りや本学の留学制度などについて説明しました。

また、留学生向けの全体説明会では、本学の特色や施設、行事、留学生の支援制度についての説明が行われた後、私費外国人留学生試験等に関する受験資格や試験科目、注意事項についての説明が行われました。引き続き、先輩留学生の体験談として、朱 燕男さん（学校教育教員養成課程教育科学専攻）と LE PHUONG NINH さん（教養学科情報科学専攻）が、それぞれ本学の良さや試験対策について語ってくれました。

午後に開催された交換留学や語学研修に関心のある日本人受験者向けの全体説明会では、ソウル教育大学（韓国）に留学した片山 元裕さん（教養学科文化研究専攻社会文化コース）、グリフィス大学に留学していた片岡 優佳さん（教養学科情報科学専攻）及びオーボ・アカデミー大学バーサ校に留学していた山本 絢子さん（幼稚園教員養成課程）が、留学までの道のりや実際の留学生活について語りました。彼らはチューターとしても受験生からの個別の相談質問に応じ、受験生は先輩の説明に熱心に耳を傾けていました。

平成 28 年度前期留学生修了証書授与式を挙行

平成 28 年 8 月 10 日（水）

平成 28 年度前期留学生修了証書授与式が 8 月 10 日（水），柏原キャンパス大学会館 1 階「Dining Terra」で執り行われ，特別聴講学生 31 人，日本文化研修留学生 16 人，研究留学生 1 人が出席しました。栗林澄夫学長から名前が呼ばれると，修了生代表者が壇上へ上がり，修了証書を受け取りました。

栗林学長が祝辞を述べた後，特別聴講学生の GRZANNA SABINE さん（ドイツ）と日本文化研修生の SAGADE PUNAM ASHOK さん（インド）が修了生を代表して，それぞれ挨拶をしました。特別聴講学生の GRZANNA さんは，「今回の留学生活では，大阪教育大学でたくさんの事を学びました。様々な日本らしい体験もできて，みんなと一緒に良い思い出をたくさん作ることができました。私たちは，帰国後それぞれの道を歩むことになりますが，この留学で出会ったすべての方と，まだどこかで会えることを楽しみにしています」と笑顔で挨拶をしました。

その後，地域の国際交流団体，教員及びチューターの日本人学生等とともに交流会を行いました。交流会では，修了生全員が日本語で留学の思い出やお世話になった方々への感謝の気持ちをスピーチし，大学からは修了生に記念品が贈られました。最後には，参列者全員でアーチの花道を作って送り出すと，修了生たちは留学生活に名残を惜しみながら，会場を後にしました。



第6回国際センターシンポジウムを実施

平成 28 年 7 月 20 日（水）

第7回国際センターシンポジウム「海外教育実習の現状と展望」が7月20日（水）に柏原キャンパスで本学国際センターと教員養成課程の共催により開催され、学生、留学生、教職員ら約80人が参加しました。

はじめに、台湾・高雄師範大学教授兼附属高校校長鄭ト五教授が、台湾の教育実習を歴史的に概説し、本学と同大学が協力して同校付設小学部で実施している海外教育実習を紹介しました。韓国・ソウル教育大学美術専攻学生のキム・ユリ氏からは、日本とオーストラリアでの教育実習の経験が語られました。韓国・忠南大学校の崔英淑教授は、同大学で実施している中国での海外教育実習について紹介し、「実習を行う延辺地区は韓国語が話せる朝鮮族が多く住んでいるため、語学的な障害がないので、違う制度下での教育について理解が進んだ」と述べました。続いて本学教養学科芸術専攻書道コース学生の岡西望実氏が、本学協定校である台湾・台北教育大学での教育実習について発表し、日本と台湾の書道教育の差異を説明しました。最後に、本学学校教育講座・水野治久教授が高雄師範大学での海外教育実習について報告し、「生徒・児童との語学を用いたコミュニケーションは重要だが、それにもまして言語を用いないコミュニケーションが重要であり、その経験は教員になってから有形無形の財産になる」と参加者に語りかけました。

第二部では、本学国語教育講座・井上博文教授が司会を務め、講演者およびパネリスト全員によるパネルディスカッションを行い、日・台・韓の海外教育実習への取組み状況や課題について活発な議論が行われました。また、共通の課題として学生の経済的負担があり、パネリストからは奨学金の獲得や大学からの援助等各国の取り組みが紹介されました。

シンポジウムのコーディネーターを務めた本学国際センター・城地茂教授は、「発表の中で、日本国内での教育実習と海外での教育実習の比較が特に印象に残りました。国内、国外での教育実習を連携させて行うことが、これからの本学の国際化の大きなポイントになると感じました」と感想を述べました。



柏原市民に講演 ―異文化の暮らしを学習しよう―

平成 28 年 12 月 7 日（水）

12 月 7 日（水）、柏原市フローラルセンターで毎年実施されている講座「異文化の暮らしを学習しよう」において、本学の留学生ステファニア・ゲタニドゥさんが講師として招かれ、出身国のギリシャについて紹介しました。ステファニアさんは、幼稚園教員養成課程 3 回生です。

ステファニアさんの話は、数千年前にさかのぼる古代ギリシャの歴史、近代ギリシャ成立までとその後の歴史、オリュンポス十二神、キリスト教に因む洗礼やクリスマス、イースターなどの伝統行事、衣服、食事、音楽や踊りと非常に幅広いものでしたが、スライドや動画を使い、自身の家族の写真も見せて人々の日常生活に触れながら、丁寧に分かりやすく説明しました。

質疑応答の時間には、参加者の皆さんが「主な産業は何ですか」など熱心に質問していました。また、「ギリシャという国の全体像がよく分かった」「これまで知らなかったことが数多く学べた」「次回の講座も楽しみにしている」との声が寄せられ、大変好評でした。



留学生による無料語学教室（Language Table）

平成 28 年 11 月～12 月

本学で学ぶ留学生と日本人学生の交流促進を目的として平成 19 年にスタートした「留学生による無料語学教室」は、今年で 10 年目を迎えました。第 19 回となる平成 28 年度は、外国語学習支援ルーム（GLC）と協力し、留学生による語学教室に加えて、日本人学生 2 名による留学生のための関西弁教室も開催しました。留学生による語学教室はスペイン語・韓国語・中国語が開講され、計 31 名が参加し、留学生の母語をとおした国際交流を楽しみました。又、日本人学生による関西弁教室には 16 名の留学生が参加し、この地域の方言である関西弁独特のユニークな言い回し等を楽しく学習しました。どの教室も和やかな雰囲気が進められ、留学生・日本人学生ともに言語学習を越えた文化交流という貴重な時間を過ご

せたようです。

秋季日本文化研修－滋賀方面－

平成 28 年 11 月 26 日（土）

秋季日本文化研修を、11 月 26 日（土）に実施しました。本研修は、本学留学生に対し日本の伝統文化に触れさせ、より深く理解する機会を与えることとともに、日本人学生と留学生の交流を促進することを目的として、毎年の恒例行事として行っています。今年は留学生・日本人学生 74 名と引率教職員 4 名で、滋賀県を訪れました。

朝に大学をバスで出発し、まずは甲賀市にある「信楽陶芸村」を訪問しました。信楽といえば信楽焼、中でも狸の焼き物が有名ですが、工房のそばに大小多数の狸の焼き物が飾られており、たくさんの狸に囲まれて全員で集合写真を撮影しました。その後、工房では絵付け体験に挑戦しました。湯飲みに筆でそれぞれが好きな絵を描くのですが、学生たちはこだわりを随所に見せながら熱心に制作を進め、作品をお互いに見せ合いながら楽しそうに取り組んでいました。絵付けをした湯飲みは、工房で焼いていただいて、後日大学へ送ってもらうことになっており、オリジナル湯飲みの完成を楽しみに、工房を後にしました。

絵付け体験を終えた後は、陶芸村に併設されているレストランですき焼きを堪能しました。留学生の中にはすき焼きをはじめて食べる学生も多く、日本人学生や引率教職員に食べ方を教わりながらおいしい料理に舌鼓を打っていました。

午後は大津市へ移動し、今年リニューアルした琵琶湖博物館を訪問しました。博物館を見学する前に施設横の琵琶湖岸を散歩したのですが、留学生らは壮大な湖と自然の景観に喜び、スマホを片手に記念写真を撮り合っていました。館内では、琵琶湖をテーマに、人間の暮らしや自然のあり方など様々な分野の展示が行われていました。昔の家電製品なども展示されており、留学生だけでなく日本人学生も興味津々のようでした。また、館内には他にも琵琶湖に住む魚たちなどが飼育されているアクアリウムやお土産コーナーなどが充実しており、学生たちは時間ぎりぎりまで見学を楽しんだ後、名残を惜しみながら大阪への帰路につきました。

友人たちとともに大阪とはまた違う日本の文化を体験でき、留学生たちにとっては充実した一日になったのではないかと思います。



留学生のための門松づくり体験

平成 28 年 12 月 14 日

12 月 14 日（水）、シニア自然大学校の皆様主催により、今年度も恒例の「門松づくり」体験を開催していただきました。日本人でも門松を作るようなことは少なくなり、留学生にとっては貴重な体験です。

参加した留学生達のために立派な孟宗竹や南天、千両、万両、そしてメインとなる松などの材料が用意されました。松は、2 年経たないと松木履を实らせませんが、その貴重な 2 年物の松をいただき、門松作りが始まりました。留学生も初めて引いて切るといふ日本の鋸を使うのか、最初は戸惑っていましたが、慣れると上手に竹を切って行きました。シニア自然大学校の皆様にやさしく手ほどきいただきながら、立派な門松を完成させました。この日参加した留学生は 30 名、シニア自然大学校の皆様は 70 名も見えられるなど、門松づくりは七夕の笹飾りとあわせて留学生に大人気の体験プログラムです。

また、門松作りの後は、折り紙も教えて頂き、束の間のひとときを地域の皆様と交流し、自然に触れ合う素晴らしい機会を満喫していました。シニア自然大学校の皆様、ありがとうございました。



留学生に奨学金を授与

平成 28 年 12 月 7 日（水）

大阪教育大学留学生後援会による平成 28 年度奨学金目録贈呈式を 12 月 7 日（水）に開催し、私費外国人留学生に奨学金を授与しました。

留学生後援会は、留学生への経済的支援、地域との国際交流の促進を目的として、地域の支援団体及び本学教職員等により構成された組織で、平成 15 年度から毎年、留学生に対し奨学金を授与しています。今年度は、寄付団体名を冠した奨学金 5 名、留学生後援会奨学金 7 名、大阪柏原ロータリークラブ教育支援金 3 名の計 15 名に奨学金を授与しました。

留学生代表として挨拶した教育学部 3 年生ファム ティー トウンさん（ベトナム）は、「小さい頃から日本の文化や発展した技術に憧れ、日本での豊かな生活、新しい教育環境を実感したいと思い、日本に留学しました。家族と離れアルバイトをしながら勉強を続けてきた私にとって、いただいた奨学金は大変貴重で大きな支えとなり、そして学業やサークル活動に多くの時間をかけることができます。これから地域の発展や伝統文化を次世代に引き継ぐための活動について研究し、将来は帰国して地元の重要な文化を守りたいです。いただいた奨学金や機会を無駄にせず、夢に向かって努力していきます。」とお礼の言葉を述べました。

留学生後援会では、今後も制度の拡充をめざし支援の輪を広げていきます。

奨学金等提供団体

- ◆ 国際ソロプチミスト大阪－柏原
- ◆ 柏原ライオンズクラブ
- ◆ 大阪柏原ロータリークラブ
- ◆ 株式会社福和楽
- ◆ 大阪教育大学教育振興会
- ◆ 大阪教育大学生協
- ◆ 大阪教育大学留学生後援会



平成 28 年度国際センター運営委員会名簿

区 分	氏 名	所 属	備 考
国際センター長	高 橋 登	学校教育講座（兼任）	委員長
国際センター専任教員	長谷川 ユ リ	国際センター	
	城 地 茂	国際センター	(宿舎運営)
	赤 木 登 代	国際センター	
	中 山 あおい	国際センター	(宿舎運営)
	古 川 敦 子	国際センター	(宿舎運営)
国際センター兼任教員 ＊	加 藤 可奈衛	美術教育講座	(宿舎運営)
	小 林 和 美	社会科教育講座	
	水 野 治 久	学校教育講座	
	石 橋 紀 俊	日本・アジア言語文化講座	(宿舎運営)
	井 上 直 子	欧米言語文化講座	
	藤 田 修	情報科学講座	
	松 本 マスミ	欧米言語文化講座	
	辻 本 英 和	社会文化講座	
	中 田 博 保	自然研究講座	
学 長 指 名 委 員 ＊	橋 本 健 一	英語教育講座	
	森 下 直 也	学術連携課長	

＊任期：平成 28 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日

平成 28 年度留学生宿舎運営会議名簿

氏 名	所 属	備 考
中 山 あおい	国際センター（国際教育）	委員長
城 地 茂	国際センター（国際事業）	
古 川 敦 子	国際センター（国際教育）	
加 藤 可奈衛	美術教育講座	
石 橋 紀 俊	日本・アジア言語文化講座	

任期：平成 28 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日

平成 28 年度国際交流委員会委員名簿

	氏 名	備 考
副学長	向 井 康比己	委員長
国際センター長	高 橋 登	副委員長
国際センター 専任教員	長谷川 ユ リ	国際教育
国際センター 専任教員	城 地 茂	国際事業
国際センター 専任教員	赤 木 登 代	国際事業
国際センター 専任教員	中 山 あおい	国際教育
国際センター 専任教員	古 川 敦 子	国際教育
国際センター 兼任教員	水 野 治 久	
国際センター 兼任教員	松 本 マスミ	
教員養成課程＊	瀬戸口 昌 也	
教員養成課程＊	橋 本 健 一	
教養学科＊	鈴 木 剛	
教養学科＊	中 野 知 洋	
夜間学部＊	斐 光 雄	
大学院連合教職実践研究科＊	柏 木 賀津子	
学部学術連携課長＊	森 下 直 也	

＊任期：平成 28 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日

平成 28 年度私費留学生奨学金等推薦選考会議名簿

所 属 等	氏 名	備 考
国際センター長	高 橋 登	委員長 学校教育講座
国際センター（国際教育）	長谷川 ユ リ	国際センター
	水 野 治 久	学校教育講座
	橋 本 健 一	英語教育講座

任期：平成 28 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日

平成 28 年度留学生推薦選考会議名簿

所 属 等	氏 名	備 考
国際センター長	高 橋 登	委員長
国際センター（国際教育）	長谷川 ユ リ	国際センター
	松 本 マスミ	欧米言語文化講座
	中 野 知 洋	日本アジア言語文化講座

*任期：平成 28 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日

平成 28 年度留学生推薦選考会議語学評価委員名簿

担当言語	氏 名	所 属
英 語	松 本 マスミ	欧米言語文化講座
中 国 語	中 野 知 洋	日本アジア言語文化講座
ドイツ語	赤 木 登 代	国際センター（国際事業）
韓 国 語	小 林 和 美	社会科教育講座
フランス語	井 上 直 子	欧米言語文化講座

編集後記

大阪教育大学の組織改革で、『国際センター年報』としては、最後の年報になります。来年度は、国際センターは、グローバルセンター（GC）またはグローバルエデュケーションセンター（GEC）に発展的に解消し、その年報となる予定だからです。

年報の内容も今年度からは刷新され、寄稿文を主としたものとなり、また、従来の紙媒体から、電子出版へと変化しました。時代の趨勢とは言え、変化が目まぐるしく、試行錯誤の毎日です。

現在、台湾大学の旧・台北帝国大学時代の線装本の調査をしているのですが、300年以上経ったものが、残されていました。内容は、いわゆる和算書であり、戦後、ほとんど顧みられることがなく、もともとあった数学教室ではなく、文学部の講演室の倉庫に置かれていたというものでした。紙媒体であれば、忘れさらられても、物理的に残ってさえいれば、何百年経っても手に取ることができます。しかし、電子媒体ですと、フォーマットが変わってしまうと、果たして解読が可能なかどうか、編集をされていて不安に思うときがあります。記憶媒体にしても、私の世代ですと、紙に穴を空けたテープのようなものも記憶にあります。その紙テープに記録されたものを21世紀の現在、まだ、半世紀しか経っていませんが、読み取ることは困難でしょう。磁気テープを経て、フロッピーを覚えている方も多いでしょうが、今、フロッピーそのものを見つけることも難しいでしょう。

当然、媒体を移し替えるという作業は進められているのですが、電子媒体は、継続していれば、次から次へと伝承できるのですが、一度、中断してしまうと、復元が困難になってしまうということでしょうか。

そうしたことを考えると電子媒体へと変化した『国際センター年報』ですが、これからも絶えることなく、続いて行くことを願ってやみません。

末筆になりましたが、本誌に投稿していただいた先生方に感謝いたします。ありがとうございました。

2017年3月21日

文責・城地茂

2017年3月31日 発行

大阪教育大学国際センター年報 第21号

Bulletin of Osaka Kyoiku University International Center, No. 21

編集兼発行者

大阪教育大学 国際センター

〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘 4-698-1

電話：072-978-3299, 3300